

授 業 構 想

——「川とノリオ」（いぬい とみこ・作）——

廣 田 隆 志

一 教科書教材「川とノリオ」の全文

「川とノリオ」は、教育出版社・六年上の教科書の七十六ページから八十七ページに掲載されている教材である。

町外れに行く、いなかびたひと筋の流れだけれど、その川はずかしい音をたてて、さらさらと休まず流れている。日の光のチロチロゆれる川底に、茶わんのかげらなどしずめたまま。

春にも夏にも、冬の日にも、ノリオはこの川の声を聞いた。

母ちゃんの生まれるもつと前、いや、じいちゃんの生まれるもつと前から、川はいつときの絶え間もなく、この音をひびかせてきたのだろう。山の中で聞くせせらぎのような、なつかしい、昔ながらの川の声を——。

早春

あったかい母ちゃんのはんてんの中で、ノリオは川のおいをかいた。

母ちゃんの手が、せっせと動かたびに、はんてんのえりもともせわしくゆれて、ほったの上のなみだのあとに、川風がすうすうと冷たかった。

川つぶちの若いやなぎには、銀色の芽がもう大きかった。

赤んぼのノリオのよごれ物を洗う、あったかい母ちゃんの背中の中で、ノリオは川のおいをかいた。土くさい、春のおいをかいた。

*

すすきのほか、川つぶちで旗をふった。ふさふさゆれる三角旗さんかくはたを。すすきの銀色の旗の波と、真っ白いのぼりに送られて、ノリオの父ちゃんは、行ってしまった。

暗い停車場の待合室で——父ちゃんのかたいひらのひらが、いつときもおしいというように、ノリオの小さい足をさすっていた。父ちゃんを乗せていった貨物列車の、馬たちの飼葉のすえたにおい。

すすきはそれから川つぶちで、白くほけた旗をふり、——母ちゃんとノリオは橋の上で、夕焼け空をながめていた。暮れかけた町の上の広い広い空。母ちゃんの日に焼けた細い手が、きつくつくノリオをだいていた。

ぬれたような母ちゃんの黒目に映って、赤とんぼがすいすい飛んでいった。川の上をどこまでも飛んでいった。

また早春

(おいで、おいで。つかまえてごらん。

わたしは、だあれにもつかまらないよ。)

川の水がノリオを呼んでいる。白じらと波だって笑いながら。

ノリオの新しいくりのげたが、片一方、ぶっかりと水にういた。

じいちゃんの手作りのくりの木のげた……。

げたは、ぶっかぶっか流れだす。くるくる回って流れていく。ノリオの知らない川下さして。

ノリオは、もう片方のくりのげたも、夢中で川の上に投げた。げたは、新しい裏を見せて、仲間のあとを追っかけていく。くるくる、かぶりことうかんだまま。

(おいで、おいでよ。おまえもおいで。)

わたしは、だあれにもつかまらないよ。)

川はますます白い波をたてて、やさしくノリオに呼びかける。

ノリオのはだしの片足が、ポチャリとすき通った水に入る。ひやっと冷たい三月の水。

冬ズボンのすそをたくし上げて、ノリオは川をわたりだす。三月の川の冷たさに、キャッキョッと一人笑いながら。

川はいつのまにか笑いをやめて、ひたひたとノリオを取り巻いた。あとからあとから流れ寄せる銀色の水のまん中で、ノリオは、はっと立ちすくむ。

ザアザアとおし寄せてくるこわい川。川は今ノリオをおし流して、川下へさらっていくのではないか。ノリオのくりの木のげたのように。

おびえてわあっと泣きかける時、だれかの手がノリオの体をひっ

とらえ、安全な川っぶちの砂の上に、ノリオは無事に引き上げられる。

流したはずのくりのげたも、ちゃんと二つ、川から取りもどされ、ノリオは小さいおしりのはたに、母ちゃんのおしおきをうんともらう。

(ノリオ、ノリちゃん、この悪ぼうず。今度川へなんぞ入ったら、このおしりにやいとをすえてやる……)

川はしばらくだまっている。

泣いてる子供なんか知らないよ、というように、大根のかれっ葉をうかべながら、すましこんでさらさら流れていく。

母ちゃんは「ハイキュウ」に呼ばれていった。

ノリオは、塩っからいなみだのつぶを、ひりひりする手のこうでふいてしまった。

川はまた、キラキラ笑いだす。笑ってノリオにさそいかける。

(おいで、おいでよ。つかまえてごらん。)

おまえのげたのふね、流してごらん。)

げたはまた、くるくる流れていき、もう一度川の中に立ちすくんだノリオの体は、不意にまた現れた母ちゃんの手で、川っぶちの砂の上に連れもどされる。

おしりのはたのおしおきも、もう一度。

川と、ノリオと、母ちゃんの、こんなひと続きの「追いかけて」は、戦いの日の間続いていた。

母ちゃんは日に日にやつれたが、ノリオは何も知らなかった。あつたかい春の日ざしを浴びて、川と一日じゅう遊んで暮らす、ノリオは小さい神様だった。金色の光に包まれた、幸せな二才の神様だった。

夏

悲しそうな役場のサイレンが、とぎれとぎれにほえだすと、この町にはなにごともなくとも、ノリオたちは穴倉に入らなければならぬ。

せみの声も川の音も聞こえない、しめっばい防空ごうの暗やみで、ノリオは出たいと、ぐずって泣いた。

ふとおしつけた母ちゃんのむねが、とっきんととっきん、鳴っていたが、ノリオは穴倉の息苦しさに、暴れて出たいと泣きたてた。

母ちゃんと、やっと出て見た見た青空には、不思議なものが生まれていた。キラリ、キラリ、遠くなる光の点。そのあとに、せんに見た

父ちゃんのたばこのけむりのような、白い筋がスルスルと生まれてきた。

さざ波のあとのようにいく筋か、空の果てに並んでいるものもあつた。

「B₂₉……」。

小声で母ちゃんと言う。

ノリオは空の不思議な雲と、頭きんの中の母ちゃんの引きしまった横顔を見比べていた。なぜかせみの声はやんでいて、川の音だけがはっきりと聞こえていた。

八月六日

母ちゃんが、お米一しようとかえてきたノリオの黒いゴムぐつを、川はたぶたぶ流していった。

ノリオのまっさらの麦わらぼうしも、川はぶかぶか流していった。ノリオの黒いパンツまで、川は流してしまつたが、すぐにそんな物を取りもどして、ノリオのおしりにおしおきする母ちゃんが、今日は、来なかつた。

黒いゴムぐつは帰ってこない。

麦わらぼうしも帰ってこない。

黒いパンツも、行ったきり……

*

ノリオは遊びつかれていた。

朝のうち、ドド……とびびいた何かの音に、一ぺんだけじいちゃんに連れもどされたほかは、一日じゅう川の中にノリオはいた。ねむたく、暗いような目の前に、赤や青の輪がぐるぐるする。

夕暮れの川はまぶしかった。

ノリオは生ぬるい水の中を、つかれはててジャブジャブわたりながら、ザアザア高まる川音の中に、ただ、母ちゃんを待っていた。なにもかも、よくしてくれる母ちゃんの手。ぴしゃり、とおしりをぶつ、あつたかいあの手……

*

夜が来て、ノリオは家へ帰つたが、母ちゃんもどっていなかった。

近所の人が、せわしく出入りする。

おそろしそうな、人々のささやきの声。

ノリオの家の母ちゃんは、この日の朝早く汽車に乗って、ヒロシマへ出かけていったという。

黒いきれを垂らした電灯の下に、大人たちの話が続いていた。
じいちゃんが、夜おそく出かけていった。

おぼんの夜（八月十五日）

前に死んだ、ばあちゃんの仏だんに、新しいぼんちようちんが下がっている。

じいちゃんはきせるをみがいている。ジュースと焼けるくさいやにのにおい。

ときどき、じいちゃんの横顔が、へいけがにのように、ぎゅっとゆがむ。ごま塩のひげがかすかにゆれて、ぼったり、ひざにしずくが落ちる。

*

母ちゃんのもどってこないノリオの家。

じいちゃんがノリオの雑^{ぞう}すいをたいた。

ぼうっと明るいくどの火の中に、げた作りのじいちゃんの節くれだった手が、ぶるぶるふるえて、まきを入れる。

ぼしゃぼしゃと白くなった、じいちゃんのかみ。

ノリオは、じいちゃんの子になった。たばこくさいじいちゃんにだかれてねた。

また秋

あらしが過ぎた。

川つぶちの雑草のしげみのかげで、こおろぎが昼間も、リリリリと鳴いた。

すすきがまた、銀色の旗をふり、父ちゃんが戦地から帰ってきた。父ちゃんは小さな箱だった。

じいちゃんが、う、うっと、きせるをかんだ。

川が、さらさらと歌っていた。

冬

こおりつくようななまり色の川。川つぶちを走る空っ風が、ひび

にしてみる。

電線はヒューンと泣いているが、ノリオの家のあひるっ子は、元気だぞ。

ノリオの家の白い二羽のあひるは、川の中で泳ぎの競争だ。

なまり色の中の生きた二点。

じいちゃん工場へ通っている。弁当を持って、毎日、空っ風の中を。

*

川つぶちにはもう青いぬぶぐりがさいて、タカオが父ちゃんと自転車で通る。

タカオは自転車の後ろで笑ってたぞ。大きな、たのもしそうな、タカオの父ちゃん。

ノリオは、川つぶちのかれ草の中で、もうじき来る春を待っている。

また、八月の六日が来る

さらさらとすずしいせの音をたてて、今日もまた川は流れている。

川の底から拾ったびんのかげらを、じいっと目の上に当てていると、ノリオの世界はうす青かった。

ガラガラ照りつける真夏の太陽も、銀色にキラキラ光るだけ。

*

いくたびかのあの日がめぐってきた。

まぶしい川のまん中で、母ちゃんを一日じゅう、待ってたあの日。そしてとうとう母ちゃんが、もどってこなかった夏のあの日。

ドド……ンという遠いひびきだけは、ノリオも聞いたあの日の朝、母ちゃんはヒロシマで焼け死んだという。ノリオたちがなんにも知らないままに。

じいちゃんが、母ちゃんを探して歩いた時、暗いヒロシマの町には、死がいから出るりんごの火が、いく晩も青く燃えていたという。

折り重なってたおれた家々と、折り重なって死んでいる人々の群れ……。子供を探す母ちゃんと、母ちゃんを探す子供の声。

そして、ノリオの母ちゃんは、とうとう帰ってこないのだ。じいちゃんも、ノリオもだまっている。

年寄りすぎたじいちゃんにも、小学二年のノリオにも、何が言えよう。

*

ノリオは、青いガラスのかけらを、ぼんと川の水に投げてやった。すぐにまぶしい日の光が、ノリオの世界に返ってきて、ノリオは仕事を思い出す。

じいちゃんの工場のやぎっ子の干し草かりが、ノリオの仕事だ。書々としげった岸辺の草に、サクッ、サクッとまたかまを入れたすと、桜の木につないだやぎっ子が、ミエエ、ミエエとノリオを呼んだ。

母ちゃんやぎを呼ぶような、やぎっ子の声。草いきれのひどいかり草の上で、ノリオはやぎっ子と、取っ組み合う。上になり、下になり、転げ回る。青い空を映しているやぎの目玉。

*

白い日がさがチカチカゆれて、子供の手を引いた女の人が、葉桜の間を遠くたった。
ザアザアと音を増す川のひびき。

ノリオは、かまをまた使いだす。

サクッ、サクッ、サクッ、母ちゃん帰れ。

サクッ、サクッ、サクッ、母ちゃん帰れよう。

川は日の光を照り返しながら、いつときも休まず流れ続ける。

二 原文と教科書教材との比較

原文は『川とノリオ』（理論社・一九九三年九月第一二刷発行）に、五ページから二二ページにかけて掲載されている。原文を引用しながら、教科書教材との違いを示すことにする。前の文が原文、後の文が教科書の文である。

町はずれをいく、いなかびたひとすじの流れだけれど、その川はすずしい音をたてて、さらさらとやすまず流れている。（原文）

町外れを行く、いなかびたひと筋の流れだけれど、その川はすずしい音をたてて、さらさらと休まず流れている。（教科書）

日の光のチロチロゆれる川ぞこに、茶わんのかけらなどしずめたまま。

日の光のチロチロゆれる川底に、茶わんのかけらなどしずめたま

ま。

春にも夏にも、冬の日にも、ノリオはこの川の声をきいた。
春にも夏にも、冬の日にも、ノリオはこの川の声を聞いた。

かあちゃんの生まれるもつとまえ、いや、じいちゃんの生まれるもつとまえから、川はいつとぎのたえまもなく、この音をひびかせてきたのだから。

母ちゃんの生まれるもつと前、いや、じいちゃんの生まれるもつと前から、川はいつとぎの絶え間もなく、この音をひびかせてきたのだから。

山の中で大きくせせらぎのような、なつかしい、むかしながらの川の声を――
山の中で聞くせせらぎのような、なつかしい、昔ながらの川の声を――。

早春
早春

あったかいかあちゃんのはんてんの中で、ノリオは川のおいをかいた。

あったかい母ちゃんのはんてんの中で、ノリオは川のおいをかいた。

かあちゃんの手が、せつせとうごくたびに、はんてんのえりもともせわしくゆれて、ほったの上のなみだのあとに、川風がすうすうとつめたかった。

母ちゃんの手が、せつせと動くたびに、はんてんのえりもともせわしくゆれて、ほったの上のなみだのあとに、川風がすうすうと冷たかった。

川つぶちのわかいヤナギには、銀いろの芽がもう大きかった。
川つぶちの若いやなぎには、銀いろの芽がもう大きかった。

赤んぼのノリオのよごれものをあらう、あったかいかあちゃん
せなかの中で、ノリオは川のおいをかいた。

赤んぼのノリオのよごれ物を洗う、あったかい母ちゃんの背
中で、ノリオは川のおいをかいた。

土くさい、春のにおいをかいだ。

*

ススキの穂が川つぶちで旗をふった。

すすきのほが、川つぶちで旗をふった。

ふさふさゆれる三角旗を。

ススキの銀いろの旗の波と、まっ白いノボリに送られて、ノリオのとうちゃんは、いってしまった。

すすきの銀色の旗の波と、真っ白いのぼりに送られて、ノリオの父ちゃんは、行ってしまった。

くらい停車場の待合室で——とうちゃんのかたい手のひらが、いっときもおもしろいというように、ノリオの小さい足をさすっていたけ。

暗い停車場の待合室で——父ちゃんのかたいてのひらが、いっときもおもしろいというように、ノリオの小さい足をさすっていたけ。

とうちゃんをのせていった貨物列車の、馬たちのかいばのすえたにおい。

父ちゃんを乗せていった貨物列車の、馬たちの飼いの葉のすえたにおい。

ススキはそれから川つぶちで、白くほほけた旗をふり、——
かあちゃんとノリオは橋の上で、夕やけ空をながめていた。

すすきはそれから川つぶちで、白くほほけた旗をふり、——
母ちゃんとノリオは橋の上で、夕焼け空をながめていた。

くれかけた町の上のひろいひろい空。
暮れかけた町の上の広い広い空。

かあちゃんの日にはやけたほそい手が、きつくきつくノリオをだいていた。
母ちゃんの日には焼けた細い手が、きつくきつくノリオをだいていた。

ぬれたようなかあちゃんの黒目にうつつて、赤トンボがすいすい飛んでいった。
ぬれたような母ちゃんの黒目に映って、赤とんぼがすいすい飛ん

でいった。

川の上をどこまでも飛んでいった。

また早春そうしゅん

また早春

(おいで、おいで。つかまえてごらん。

わたしは、だあれにもつかまらないよ)

(おいで、おいで。つかまえてごらん。

わたしは、だあれにもつかまらないよ。)

川の水がノリオをよんでいる。

川の水がノリオを呼んでいる。

白しろじらと波なみだ立たってわらいながら。

白しろじらと波なみだだだって笑わらいながら。

ノリオのあたらしいクリのげたが、かたいっぽう、ぶっかりと水に浮ういた。

ノリオの新あたらしいくりのげたが、片一方、ぶっかりと水にういた。

じいちゃんの手づくりのクリの木のげた……。

じいちゃんの手づくりのくりの木のげた……。

げたは、ぶっかぶっか流れだす。

くるくるまわって流ながれていく。

くるくる回まわって流ながれていく。

ノリオの知らない川のしもさして。

ノリオの知らない川の下さして。

ノリオはもうかたほうのクリのげたも、むちゅうで川の上になげてやった。

ノリオは、もう片方のくりのげたも、夢中で川の上に投なげてやっ

た。

げたは新しいうらを見せて、なかまのあとをおっかけていく。
げたは、新しい裏を見せて、仲間のあとを追っかけていく。

くるくる、かっぷりこと浮かんだまま。
くるくる、かっぷりことうかんだまま。

(おいで、おいでよ。おまえもおいで。)

わたしは、だあれにもつかまらないよ。

(おいで、おいでよ。おまえもおいで。)

わたしは、だあれにもつかまらないよ。)

川はますます白い波をたてて、やさしくノリオによびかける。
川はますます白い波をたてて、やさしくノリオに呼びかける。

ノリオのはだしのかた足が、ポチャリとすきとおった水にはいる。
ノリオのはだしの片足が、ポチャリとすき通った水に入る。

ひやとつめたい三月の水。
ひやと冷たい三月の水。

冬ズホンのすそをたくしあげて、ノリオは川をわたりだす。
冬ズホンのすそをたくし上げて、ノリオは川をわたりだす。

三月の川のつめたさに、キャッキャッとひとりわらいながら。
三月の川の冷たさに、キャッキャッと一人笑いながら。

川はいつのまにかわらいをやめて、ひたひたとノリオをとりまいた。
た。

川はいつのまにか笑いをやめて、ひたひたとノリオを取り巻いた。
あとからあとから流れよせる銀いろの水のまんなかで、ノリオは、はっと立ちすくむ。

あとからあとから流れ寄せる銀色の水のまん中で、ノリオは、はっと立ちすくむ。

ザアザアとおしよせてくるこわい川。

ザアザアとおし寄せてくるこわい川。

川はいまノリオをおし流して、川しもへさらっていくのではないか。
川は今ノリオをおし流して、川下へさらっていくのではないか。

ノリオのクリの木のげたのように。
ノリオのくりの木のげたのように。

おびえてわあっと泣きかけるとき、だれかの手がノリオのからだをひつとらえ、あんぜんな川つぶちのすなの上に、ノリオはぶじにひきあげられる。

おびえてわあっと泣きかける時、だれかの手がノリオの体をひつとらえ、安全な川つぶちの砂の上に、ノリオは無事に引き上げられる。

流したはずのクリのげたも、ちゃんと二つ、川からとりもどされ、ノリオは小さいおしりのはたに、かあちゃんのおしおきをうんともらう。

流したはずのくりのげたも、ちゃんと二つ、川から取りもどされ、ノリオは小さいおしりのはたに、母ちゃんのおしおきをうんともらう。

(ノリオ、ノリちゃん、このわるぼうず。こんど川へなんぞはいったら、このおしりにヤイトをすえてやる……)

(ノリオ、ノリちゃん、この悪ぼうず。今度川へなんぞはいったら、

このおしりにやいとをすえてやる……)

川はしばらくだまっている。

泣いてる子どもなんか知らないよ。というように、だいこんのかれっぱを浮かべながら、すましこんでさらさら流れていく。

泣いてる子供なんか知らないよ、というように、大根のかれっ葉をうかべながら、すましこんでさらさら流れていく。

かあちゃんは「ハイキュウ」によぼれていった。

母ちゃんは「ハイキュウ」に呼ばれていった。

ノリオは、しおっからいなみだのつぶを、ひりひりする手のこうでふいてしまった。

ノリオは、塩っからいなみだのつぶを、ひりひりする手のこうでふいてしまった。

川はまた、キラキラわらいだす。

川はまた、キラキラ笑いだす。

わらってノリオにさそいかける。
笑ってノリオにさそいかける。

(おいで、おいでよ。つかまえてごらん。)

おまえのげたの舟、流してごらん。

(おいで、おいでよ。つかまえてごらん。)

おまえのげたのふね、流してごらん。)

げたはまた、くるくる流れていき、もういちど川の中に立ちすくんだノリオのからだは、ふいにまたあらわれたかあちゃんの手で、川つぶちのすなの上につれもどされる。

げたはまた、くるくる流れていき、もう一度川の中に立ちすくんだノリオの体は、不意にまた現れた母ちゃんの手で、川つぶちの砂の上に連れもどされる。

おしりのはたのおしおきも、もういちど。

おしりのはたのおしおきも、もう一度。

川と、ノリオと、かあちゃんの、こんなひとつづきの「追いかけてこ」は、戦いの日のあいだつづいていた。

川と、ノリオと、母ちゃんの、こんなひとつづきの「追いかけてこ」は、戦いの日の間続いていた。

かあちゃんは日に日にやつれたが、ノリオはなにも知らなかった。母ちゃんは日に日にやつれたが、ノリオは何も知らなかった。

あったかい春の日ざしをあびて、川と一日じゅうあそんでくらす、ノリオは小さい神さまだった。

あったかい春の日ざしを浴びて、川と一日じゅう遊んで暮らす、ノリオは小さい神様だった。

金いろの光につつまれた、しあわせな二歳の神さまだった。

金色の光に包まれた、幸せな二才の神様だった。

夏

かなしそうな役場のサイレンが、ときれときれにほえだすと、この町にはなにごともなくともなくとも、ノリオたちは、あなぐらにはいられなければならない。

悲しそうな役場のサイレンが、ときれときれにほえだすと、この

町にはなにごともなくつても、ノリオたちは、穴倉に入らなければならぬ。

セミの声も川の音もきこえない、しめっばい防空壕のくらやみで、ノリオは出たい、とぐずって泣いた。

せみの声も川の音も聞こえない、しめっばい防空壕のくらの暗やみで、ノリオは出たいと、ぐずって泣いた。

ふとおしつけたかあちゃんの胸が、とっきんとっきん、なっているが、ノリオはあなぐらの息ぐるしさに、あばれて出たいと泣きだした。

ふとおしつけた母ちゃんの胸が、とっきんとっきん、鳴っていたが、ノリオは穴倉の息苦しさに、暴れて出たいと泣きだした。

かあちゃんと、やっと出てみた青空には、ふしぎなものが生まれていた。

母ちゃんと、やっと出てみた青空には不思議なものが生まれていた。

キラリ、キラリ、遠くなる光の点。

そのあとに、せんに見たとうちゃんのタバコのけむりのような、白いすじがスルスルと生まれていた。

そのあとに、せんに見た父ちゃんのたばこのけむりのような、白い筋がスルスルと生まれていた。

さざ波のあとのようにいくすじか、空のはてにならんでいるのもあった。

さざ波のあとのようにいく筋か、空の果てに並んでいるのもあった。

「B 29-----」 小声でかあちゃんがいう。

「B 29-----」

小声で母ちゃんが言う。

ノリオは空のふしぎな雲と、ずきんの中のかあちゃんのひきしまった横顔を見くらべていた。

ノリオは空の不思議な雲と、頭きんの中の母ちゃんの引きしまった横顔を見比べていた。

なぜかセミの声はやんでいて、川の音だけがはっきりときこえていた。

なぜかせみの声はやんでいて、川の音だけがはっきりと聞こえていた。

八月六日

かあちゃんが、お米一升とかえてきたノリオの黒いゴムぐつを、川はたぶたぶ流していった。

母ちゃんが、お米一しょうとかえてきたノリオの黒いゴムぐつを、川はたぶたぶ流していった。

ノリオのまっさらのムギワラぼうしも、川はぶかぶか流していった。

ノリオのまっさらの麦わらぼうしも、川はぶかぶか流していった。

ノリオの黒いパンツまで、川は流してしまっただが、すぐにそんなものをとりもどして、ノリオのおしりにおおきする、かあちゃんがきょうは、こなかった。

ノリオの黒いパンツまで、川は流してしまっただが、すぐにそんな物

を取りもどして、ノリオのおしりにおおきする母ちゃんが、今日は、来なかった。

黒いゴムぐつは帰ってこない。

ムギワラぼうしも帰ってこない。

麦わらぼうしも帰ってこない。

黒いパンツも、いったきり――

黒いパンツも、行ったきり――

*

ノリオはあそびつかれていた。

ノリオは遊びつかれていた。

あさのうち、ドド……ンとひびいた何かの音に、一ぺんだけはいちちゃんにつれもどされたほかは、一日じゅう川の中にノリオはいた。

朝のうち、ドド……ンとひびいた何かの音に、一ぺんだけはい

ちゃんに連れもどされたほかは、一日じゅう川の中にノリオはいた。

*

ねむたく、くらいような目のまえに、アカやアオの輪がぐるぐるする。

ねむたく、暗いような目の前に、赤や青の輪がぐるぐるする。

夕ぐれの川はまぶしかった。

夕暮れの川はまぶしかった。

ノリオはなまぬるい水の中を、つかれはててジャブジャブわたりながら、ざあざあ高まる川音の中に、ただ、かあちゃんをまっていた。

ノリオは生ぬるい水の中を、つかれはててジャブジャブわたりながら、ザアザア高まる川音の中に、ただ、母ちゃんを待っていた。

なにもかも、よくしてくれるかあちゃんの手。

なにもかも、よくしてくれる母ちゃんの手。

ぴしゃり、とおしりをぶつ、あったかいあの手……

夜がきて、ノリオは家へ帰ったが、かあちゃんもどってはいなかった。

夜がきて、ノリオは家へ帰ったが、母ちゃんもどってはいなかった。

近所の人が、せわしく出入りする。

近所の人が、せわしく出入りする。

ノリオの家のかあちゃんは、この日のあさはやく汽車にのって、ヒロシマへ出かけていったという。

ノリオの家の母ちゃんは、この日の朝早く汽車に乗って、ヒロシマへ出かけていったという。

黒いきれをたらしした電灯の下に、おとなたちの話がつづいていた。

黒いきれをたらしした電灯の下に、大人たちの話が続いていた。

じいちゃんが、夜おそく出かけていった。

お盆ぼんの夜（八月十五日）

おほんぼんの夜（八月十五日）

まえに死んだ、ばあちゃんの仏ぶつだんに、あたらしい盆ぼんちようちん
がさがっている。

前に死んだ、ばあちゃんの仏ぶつだんに、新しいほんちようちんが下
がっている。

じいちゃんはキセルをみがいている。

じいちゃんはきせるをみがいている。

ジューとやけるくさいヤニのにおい。

ジューと焼けるくさいやにのにおい。

ときどき、じいちゃんの横顔よこがほが、ヘイケガニのように、ぎゅっと

ゆがむ。

ときどき、じいちゃんの横顔よこがほが、へいけがにのように、ぎゅっと

ゆがむ。

ごましおのひげがかすかにゆれて、ぼったり、ひざにしがくがお

ちる。

ごま塩ごましおのひげがかすかにゆれて、ぼったり、ひざにしがくが落ち
る。

*

かあちゃんのもどってこないノリオの家。

母ははちゃんのもどってこないノリオの家。

じいちゃんがノリオのぞうすいをたいた。

じいちゃんがノリオの雑ぞうすいすいをたいた。

ぼうっと明るいくどの火の中に、げたつくりのじいちゃんおじいちゃんのふし

くれた手が、ぶるぶるふるえて、まきを入れる。

ぼうっと明るいくどの火の中に、げた作りのじいちゃんおじいちゃんの節ふしくれ
だった手が、ぶるぶるふるえて、まきを入れる。

ぼしゃぼしゃと白くなった、じいちゃんおじいちゃんの髪かみ。

ぼしゃぼしゃと白くなった、じいちゃんおじいちゃんのかみ。

ノリオは、じいちゃんの子になった。

タバコくさいじいちゃんにだかれてねた。
たばこくさいじいちゃんにだかれてねた。

また秋

あらしがすぎた。

あらしが過ぎた。

川つぶちの雑草（ぞうそう）のしげみのかげで、コオロギがひるまも、リリリ
りとないた。

川つぶちの雑草（ぞうそう）のしげみのかげで、こおろぎが屋間（やま）も、リリリ
と鳴いた。

ススキがまた、銀いろ（ぎんいろ）の旗（はた）をふり、とうちゃんが戦地（せんち）から帰って
きた。

すすきがまた、銀色の旗（はた）をふり、父ちゃんが戦地（せんち）から帰ってきた。
とうちゃんは小さな箱（はこ）だった。

父（ちち）ちゃんは小さな箱（はこ）だった。

じいちゃんが、う、うっと、キセルをかんだ。
じいちゃんが、う、うっと、きせるをかんだ。

川が、さらさらとうたっていた。

川が、さらさらと歌（うた）っていた。

冬

こおりつくようなナマリいろの川。
こおりつくようななまり色の川。

川つぶちをはしるからっ風（かぜ）が、ひびにしみる。

川つぶちを走る空（そら）っ風（かぜ）が、ひびにしみる。

電線（でんせん）はヒューンと泣（な）いているが、ノリオの家のアヒル（あひる）っ子は、元
気だぞ。

電線（でんせん）はヒューンと泣（な）いているが、ノリオの家のあひる（あひる）っ子は、元
気だぞ。

ノリオの家の白い二羽のアヒルは、川の中でおよぎの競争だ。
ノリオの家の白い二羽のあひるは、川の中で泳ぎの競争だ。

ナマリいろの中の生きた二点。

なまり色の中の生きた二点。

じいちゃんは工場へかよっている。

じいちゃんは工場へ通っている。

べんとうをもって、まいにち、からっ風の中を。

弁当を持って、毎日、空っ風の中を。

*

川つぶちにはもう青いイヌフグリがさいて、タカオがとうちゃん
としてんしゃでとおる。

川つぶちにはもう青いいぬぶぐりがさいて、タカオが父ちゃんと
自転車を通る。

タカオはじてんしゃのうしろでわらってたぞ。

タカオは自転車の後ろで笑ってたぞ。

大きな、たのもしそうな、タカオのとうちゃん。

大きな、たのもしそうな、タカオの父ちゃん。

ノリオは、川つぶちのかれくさの中で、もうじきくる春を待っている。

ノリオは、川つぶちのかれ草の中で、もうじき来る春を待っている。

また、八月の六日がくる

さらさらとすずしい瀬の音をたてて、きょうもまた川は流れている。

さらさらとすずしいせの音をたてて、今日もまた川は流れている。

川の底からひろったびんのかげらを、じいっと目の上にあてていると、ノリオの世界はうす青かった。

川の底から拾ったびんのかげらを、じいっと目の上に当てていると、ノリオの世界はうす青かった。

キラキラ照りつける真夏の太陽も、銀いろにキラキラ光るだけ。
キラキラ照りつける真夏の太陽も、銀色にキラキラ光るだけ。

*

いくたび目かのあの日がめぐってきた。
いくたびめかのあの日がめぐってきた。

まぶしい川のまんなかで、かあちゃんを一日じゅう、待ってたあの日。
まぶしい川のまんなかで、かあちゃんを一日じゅう、待ってたあの日。

そしてとうとうかあちゃんが、もどってこなかった夏のあの日。
そしてとうとう母ちゃんが、もどってこなかった夏のあの日。

ドド……ンという遠いひびきだけは、ノリオもきいたあの日。
ドド……ンという遠いひびきだけは、かあちゃんはヒロシマでやけ死んだという。

朝、母ちゃんはヒロシマで焼け死んだという。
朝、母ちゃんはヒロシマで焼け死んだという。

ノリオたちがなんにも知らないまに。

じいちゃんが、かあちゃんをさがして歩いたとき、くらいヒロシマの町には、死がいから出るリンの火が、いく晩も青く燃えていたという。

じいちゃんが、母ちゃんを探して歩いた時、暗いヒロシマの町には、死がいから出るリンの火が、いく晩も青く燃えていたという。

おりかさなっていたおれた家々と、おりかさなって死んでいる人びとのむれ……。

折り重なってたおれた家々と、折り重なって死んでいる人々の群れ……。

子どもをさがすかあちゃんと、かあちゃんをさがす子どもの声。子供を探す母ちゃんと、母ちゃんを探す子供の声。

そして、ノリオのかあちゃんは、とうとう帰ってこないのだ。

そして、ノリオの母ちゃんは、とうとう帰ってこないのだ。

じいちゃんも、ノリオもだまっている。

年よりすぎたじいちゃんにも、小学二年のノリオにも、なにが
えよう。

年寄りすぎたじいちゃんにも、小学二年のノリオにも、何が言え
よう。

*

ノリオは、青いガラスのかけらを、ぼんと川の水になげてやった。
ノリオは、青いガラスのかけらを、ぼんと川の水に投げてやった。

すぐにまぶしい日の光が、ノリオの世界にかえってきて、ノリオは
しごとを思い出す。

すぐにまぶしい日の光が、ノリオの世界に返ってきて、ノリオは仕
事を思い出す。

じいちゃんの工場のヤギっ子のほし草かりが、ノリオのしごとだ。

じいちゃんの工場のやぎっ子の干し草かりが、ノリオの仕事だ。

青あおしげった岸への草に、サクッ、サクッとまたかまを入れた

すと、さくらの木につないだヤギっ子が、ミエエ、ミエエとノリオ
をよんだ。

青あしげった岸の草に、サクッ、サクッとまたかまを入れたす
と、桜の木につないだやぎっ子が、ミエエ、ミエエとノリオを呼ん
だ。

かあちゃんヤギをよぶような、ヤギっ子の声。

母ちゃんやぎを呼ぶような、やぎっ子の声。

草いきれのひどいかり草の上で、ノリオはヤギっ子と、とつくみ
あう。

草いきれのひどいかり草の上で、ノリオはやぎっ子と、取っ組み
合う。

上になり、下になり、ころげまわる。

上になり、下になり、転げ回る。

青い空をうつしているヤギの目玉。

青い空を映しているやぎの目玉。

*

白い日がさがチカチカゆれて、子どもの手をひいた女の人が、葉ざくらのあいだを遠くになった。

白い日がさがチカチカゆれて、子供の手を引いた女の人が、葉桜の間を遠くになった。

ざあざあと音をます川のひびき。

ザアザアと音を増す川のひびき。

ノリオは、かまをまたつかい出す。

ノリオは、かまをまた使い出す。

サクツ、サクツ、サクツ、かあちゃんかえれ。

サクツ、サクツ、サクツ、母ちゃん帰れ。

サクツ、サクツ、サクツ、かあちゃんかえれよう。

サクツ、サクツ、サクツ、母ちゃん帰れよう。

川は日の光を照りかえしながら、いつときもやまず流れつづけ

る。

川は日の光を照り返しながら、いつときも休まず流れ続ける。

次に、原文と教科書教材を比べてみた結果について記述する。

(1) 原文では「平仮名」で表現されているものが、教科書では「漢字」で表現されているものが多い。これは第一学年から第六学年までの学年別漢字配当によるものである。変換されている漢字を、ストーリーに沿って示すものとする。なお、() 内は、漢字の配当学年である。

外 (二年)	行 (二年)	筋 (六年)	休 (一年)
底 (四年)	聞 (二年)	母 (二年)	前 (二年)
絶 (五年)	間 (二年)	昔 (三年)	動 (三年)
冷 (四年)	若 (六年)	物 (三年)	洗 (六年)
背 (六年)	中 (一年)	色 (二年)	真 (三年)
父 (二年)	暗 (三年)	手 (一年)	乗 (三年)
飼 (五年)	葉 (三年)	暁 (四年)	暮 (六年)
広 (二年)	細 (二年)	映 (六年)	呼 (六年)
笑 (四年)	新 (二年)	片 (六年)	一 (一年)
方 (二年)	作 (二年)	回 (二年)	下 (一年)

夢(五年)	投(三年)	裏(六年)	仲(四年)
追(三年)	通(二年)	入(一年)	上(二年)
人(一年)	取(三年)	巻(六年)	寄(五年)
今(二年)	時(二年)	体(二年)	安(三年)
全(三年)	砂(六年)	無(四年)	事(三年)
引(二年)	悪(三年)	度(三年)	供(六年)
大(二年)	根(三年)	塩(四年)	不(四年)
意(三年)	現(五年)	連(四年)	統(四年)
何(二年)	浴(四年)	遊(三年)	様(三年)
色(二年)	包(四年)	幸(三年)	二(二年)
才(二年)	悲(三年)	穴(六年)	倉(四年)
鳴(二年)	苦(三年)	暴(五年)	思(二年)
議(四年)	果(四年)	並(六年)	言(二年)
頭(二年)	比(五年)	麦(二年)	日(二年)
来(二年)	朝(二年)	赤(一年)	青(一年)
生(二年)	待(三年)	々(人々、青々)	早(二年)
落(三年)	雑(五年)	節(四年)	過(五年)
昼(二年)	歌(二年)	走(二年)	空(一年)
泳(三年)	弁(五年)	当(二年)	持(三年)
每(二年)	自(二年)	転(三年)	車(一年)

(2) 原文の漢字にはルビがあるが、教科書の漢字にはルビのないものである。

後(二年)	草(一年)	拾(三年)	探(六年)
折(四年)	重(三年)	群(五年)	返(三年)
仕(三年)	干(六年)	辺(四年)	桜(五年)
組(二年)	合(二年)	増(五年)	使(三年)
帰(二年)			

茶(二年)	銀(三年)	芽(四年)	旗(四年)
波(三年)	停(四年)	車(一年)	場(二年)
待(三年)	合(二年)	室(二年)	貨(四年)
物(三年)	列(三年)	橋(三年)	飛(四年)
早(一年)	春(二年)	立(一年)	白(一年)
泣(四年)	戦(四年)	役(三年)	防(五年)
空(一年)	生(二年)	小(一年)	声(二年)
横(三年)	顔(二年)	輪(四年)	近(二年)
所(三年)	電(二年)	灯(四年)	仏(五年)
雑(五年)	草(一年)	地(二年)	箱(三年)
羽(二年)	競(四年)	争(四年)	底(四年)

照(四年) 真(三年) 夏(二年) 太(二年)
陽(三年) 晩(六年) 然(五年) 家(二年)

(3) 原文は漢字だが、教科書では「平仮名」になっているものである。

① 常用漢字であるが、学年別配当表にないもの

「穂」↓「ほ」 「浮」↓「う」 「舟」↓「ふね」

「升」↓「しょう」 「盆」↓「ぼん」 「髪」↓「かみ」

「瀬」↓「せ」

② 配当漢字であるが、読み方がないもの

「立」(二年) リツ・リュウ・た ↓ 「だ」

③ 常用漢字、人名漢字以外の漢字

「塚」↓「こう」

④ 配当漢字であるが、意図的に「平仮名」にしたもの

「手」(二年) ↓ 「て」 目(二年) ↓ 「め」

(4) 常用漢字であるが配当表にないため、代用した漢字を当てたもの。

「歳」↓「才」(「歳」に代用して、年齢を表す)

(5) 教科書でルビがついているもの

B29 ビ工場(「こうじょう」と読ませないため)

雑すい(「ざつ」と読ませないため)

(6) 原文では「片仮名」であるが、教科書では「平仮名」になっているもの

「ヤナギ」↓「やなぎ」 「ススキ」↓「すすき」

「ノボリ」↓「のぼり」 「トンボ」↓「とんぼ」

「クリ」↓「くり」 「ヤイト」↓「やいと」

「セミ」↓「せみ」 「タバコ」↓「たばこ」

「ムギワラ」↓「むぎわら」 「キセル」↓「きせる」

「ヤニ」↓「やに」 「ヘイケガニ」↓「へいけがに」

「コオロギ」↓「こおろぎ」 「ナマリ」↓「なまり」

「アヒル」↓「あひる」 「イヌフグリ」↓「いぬふぐり」

「リン」↓「りん」 「ヤギ」↓「やぎ」

(7) 原文では「平仮名」のものが、教科書では「片仮名」になっているもの

「ざあざあ」↓「ザアザア」

(8) 原文では「傍点」があるが、教科書ではないもの

「かいば」↓「飼い葉」

(9) 原文では「傍点」がないが、教科書にはあるもの

「せ」「りん」

(10) 「句点」が原文にはなくて、教科書にはあるもの

「川の声を——」↓「川の声を——」。

小声で母ちゃんが言う。

・ 「わたしは、だあれにもつかまらないよ」↓「わたしは、だあれにもつかまらないよ。」

三 教材「川とノリオ」について

・ 「ヤイトをすえてやる——」↓「ヤイトをすえてやる——」。

「町外れに行く、いなかびたひと筋の流れだけれど、その川はずかしい音をたてて、さらさらと休まず流れている。」という文で始まる、この美しい散文詩的な表現のこの教材は、読者に深い感動を与えらる。

・ 「B 29——」↓「B 29——」。

(11) 「読点」が原文にはなく、教科書にはあるもの

・ 「ノリオは」↓「ノリオは、」

平和に生きることを願う庶民までも、否応なし巻き込み、不幸に陥れていく戦争の非情さを、絶叫するのではなく、美しい詩的表現の中に溶かし込みながら、しみじみとした調子で訴え掛けてくるからである。授業の中で子供は、この教材を読みながら、「語り手（三人称客観の視点）は、平和が失われていくことを残念がり、早く平和になってほしい、平和が大事だ、ということを感じながら、ノリオの姿や川の流れを見ている。」と言ったが、そういう感情が、この教材の「ことば」の端々から滲み出ている。

・ 「げたは」↓「げたは、」

(12) 原文は「句点」だが、教科書は「読点に」なっているもの

・ 泣いてる子どもなんか知らないよ。というように（原文）

泣いてる子供なんか知らないよ、というように（教科書）

(13) 読点の位置が移動したもの

・ ノリオは出たい、とぐずって泣いた。（原文）

ノリオは出たいと、ぐずって泣いた。（教科書）

・ おしおきする、かあちゃんがきょうは、（原文）

おしおきする母ちゃんが、きょうは、（教科書）

(14) 行変えがしてあるもの

・ 「B 29——」小声でかあちゃんがいう。（原文）

・ 「B 29——」。

ノリオも母ちゃんもこうして、戦争の渦中へ巻き込まれ始める。川へげたを流すノリオ。川の中へ入って行って立ちすくむノリオ。

そのげたを拾い、ノリオをひつとらえ、おしりにおしおきする母ちゃん。川と、ノリオと、母ちゃんの「追いかっこ」は、平和そのものである。

しかし、それは、何も知らないノリオの目から見た場合に言えることであって、すべてが戦争の渦中であつたのである。八月六日、朝、ヒロシマへ行つた母ちゃんは、とうとう戻つてこなかった。戦争が終つて、父ちゃんは遺骨となつて帰つて来る。ノリオは、自分がそういう不幸の中にいることを何も知らない。何も知らないだけに、却つてそこに悲劇性が高まる。

歳月が流れる。ノリオはしかし、不幸に打ちひしがれてはいない。あひるっ子のように元氣に見える。やぎっ子の干し草をかり、やぎっ子と取っ組み合う。その姿には、脈打つてやまぬ強靱な生命が感じられる。

だが、父ちゃんの自転車に乗せてもらったタカオを見る時、子供の手を引いた女の人を見る時、ノリオは「母ちゃん帰れよう。」と心の中で叫ばずにはおられない。

戦争の非情さは、戦争の終了と共に終わるのではない。それは、平和の時代にまでも、川の流れのように連続して繋がり、これから先もまだ続いていく。その連続して消え去らないところに、戦争の非情さの非情たるゆえんがある。

いなかびた、美しいひと筋の流れは、ノリオの成長と共に存在する。語り手や、ノリオの内の目と重なつた語り手の心は、川に反映するが、川そのものはノリオの不幸に同情もしなければ、戦争への怒りも示さない。ただ、流れているに過ぎない。それだけに、却つて、戦争の非情さが浮き出てくる感じを持たせるし、いつときも休まず流れる川のイメージは、戦争の非情さの連続性を思わせる。また、そうした非情さを乗り越えて、元氣に生きていこうとするノリオの前途の明るさ、希望といったものも思わせる。

教材の内容は、何ともやりきれなさを思わせるものであるが、それが暗い、重苦しいものにならなくて、しみじみとした、それでいて、ある救いを感じさせるのは、この川のイメージがもたらすものであろう。

表現上の特徴は、次の通りである。

- 三人称客観の視点（語り手）。ノリオ、父ちゃん、母ちゃん、じいちゃんを、いとおしいように眺め、川をなつかしいと感ずる視点である。時々、ノリオの内の目と重なる。
- プロローグに川を出し、ついで「早春」「また早春」「夏」「八月六日」「おぼんの夜（八月十五日）」「また秋」「冬」「また八月の六日が来る」と季節をもとにした構成が為されている。
- 美しい散文詩的な表現。

・ 会話がなく、ノリオや母ちゃんの心も、その行動によって表現されている。例えば、「母ちゃんの日に焼けた細い手が、きつくきつくノリオをだいていた。」「じいちゃんが、う、うっと、きせるをかんだ。」など。あとは、三人称客観の視点（語り手）からの思いとして語られている。

・ 戦争と関わりのある用語。「真っ白いのぼり」「防空ごう」「B29」「ヒロシマ」など。

四 作者と作品

いぬいとみこ。本名、乾 富子。児童文学者。一九二四年（大正一三年）～二〇〇二年（平成一四年）。東京生まれ。平安女学院専攻部卒業。戦中から戦後にかけて、東京・京都・山口県柳井市の幼稚園・保育園に勤務。広島に投下された原爆の閃光を見る。勤務の傍ら、児童文学誌に作品を発表し始める。その後、上京し児童書編集に携わる。

一九五〇年、児童文学者新人会に入り、長崎源之助たちと同人誌『豆の木』を創刊する。一九五三年に短編『ツグミ』を発表し、翌年日本児童文学者協会新人賞を受賞。一九五七年に、『ながいながいペンギンの話』（宝文館、のちに理論社、岩崎書店）で、毎日出版文化賞を受賞。両賞の受賞で、児童文学者としての土台が固まる。

一九五七年に『木かげの家の小人たち』で国際アンデルセン国内賞を受賞、一九六一年に『北極のムーシカミシカ』で国際アンデルセン佳作賞を受賞、一九六五年に『うみねこの空』で野間児童文芸賞を受賞し、国際的にも高く評価されるようになる。

石井桃子たちと共に『子どもと文学』（一九六〇年）で、従来の童心主義文学を批判し、仲間と共に成長していく子供の姿を描いた作品が多い。

幼年童話は短編とされていた中で、『ながいながいペンギンの話』は長編幼年童話であり、常識を覆した作品である。また、この作品は、『北極のムーシカミシカ』と同様、動物ファンタジーであり、動物の生態の科学的知識に基づいたものである。

短編『川とノリオ』は、一九五一年一〇月に長田 新編『原爆の子』を読んで原爆投下の真相を知り、自らの体験をもとに執筆して、一九五二年一月に『児童文学研究』に発表したものである。

『川とノリオ』の関連作品としては、次のようなものがある。
『休火山』、『ながいながいペンギンの話』、『北極のムーシカミシカ』、『木かげの家の小人たち』、『野の花は生きる』——リディツェと広島の花たち——、『光の消えた日』

五 目標や構成

(1) 育てたい力

〈書くこと〉

- ・ 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。B(1)ウ

〈読むこと〉

- ・ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。C(1)ウ
- 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

- ・ 語句の構成についての理解を深めること。伝イ(エ)
- ・ 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。伝イ(カ)

(2) 単元目標

- ・ 登場人物の相互関係や心情、場面について、優れた描写を味わいながら読み、自分の感想を書くことができる。
- ・ 語句の構成や語感、言葉の使い方、表現技法を理解することができるとができる。

(3) 教材の構成と時数

場面	第一場面	第二場面	第三場面	第四場面	第五場面	第六場面	第七場面	第八場面	第九場面
小見出し	プロローグ	* 早春	また早春	夏	* 八月六日	おぼんの夜 (八月十五日)	また秋	冬	* 六日、八月の また、八月の 六日が来る
ページ	初め ～ P七六L七	P七六L八 ～ P七八L四	P七八L五 ～ P七九L一五	P八〇L一六 ～ P八一L二五	P八一L二六 ～ P八三L九	P八三L一〇 ～ P八四L四	P八四L五 ～ P八五L六	P八五L七 ～ P八六L九	P八六L一〇 ～ 終わり
時	1	2	3	4	5	6	7	8	9
									10

六 授業構想

授業構想として、次の内容で記述する。

- (1) 各授業場面の教材文
- (2) 教材解釈
- (3) 本時の目標
- (4) 板書
- (5) 発問
- まとめ

(1) 教材文(第一時)

① 町外れを行く、② いなかびたひと筋の流れだけど、③ その川は④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳

い音をたてて、さらさらと休まず流れている。日の光のチロチロゆれる川底に、茶わんのかげらなどしずめたまま。春にも夏にも、冬の日にも、ノリオはこの川の声を聞いた。母ちゃんの生まれるもつと前、いや、じいちゃんの生まれるもつと前から、川はいつときの絶え間もなく、この音をひびかせてきたのだらう。山の中で聞かせせらぎのような、なつかしい、昔ながらの川の声を――。

(2) 教材解釈

① 「町外れ」

- ・ 町の端の方、にぎやかでない所、町の中心から離れた所。
- ・ 通常の文の順序——「その川は、町外れを行き、いなかびたひと筋の流れだけど、すずしい音をたてて、さらさらと休まず流れている。」↓「町外れを行く」を強調。

② 「行く」

- ・ 擬人法。
- ・ 町外れを流れる。

③ 「いなかびた」

- ・ 「いなかびる」＝田舎風でやぼったく感じられる。いかにも田舎らしいさまである。
- ・ 「びる」＝体言、形容詞の語幹などに付き、上一段活用動詞を作る。「～のような状態である」「～のようにふるまう」の意。「おとなびる」「ふるびる」。

④ 「ひと筋の流れ」

- ・ いかにも田舎らしく、静かでのどかに感じられる。
- ・ 「ひと筋」＝細長く続いている一つの川の流れ。
- ・ どこにでもある、特別に珍しくもない細長い川の流れ。

⑤ 「すずしい音」

- ・ 「すずしい」＝物のさまがさわやかである。いかにもすがすがしい音。

がしく感じられる。

• いかにもすがすがしく感じられる音。

• 川の音を「すずしい」と感じているのは語り手。

⑥ 「さらさら」

擬音語。

• 浅い川の水が小石などに当たりながら、淀みなく流れる音。

• きれいで、澄んだ川の流れを感じさせる音。

⑦ 「休まず流れている」

• 「休まず」——擬人法。

• はるか昔から流れ続けている。

⑧ 「日の光のチロチロゆれる川底」

• 「チロチロ」⇨あちこち落ち着きなく動くさま。擬態語。

• 日の光が川に反射して光り、川底で揺れている様子。

⑨ 「茶わんのかげらなど」

• 「また、八月の六日が来る」の中で、「川の底から拾ったびんのかげら」とある。「早春」では、「ノリオのよごれ物を洗う」とあり、この川を洗濯に使っている。

• この川は、川底に「茶わんのかげら」「びんのかげら」をしずめ、洗濯に使われていることから、人間の日常生活と結びついた存在の川である。

⑩ 「しずめたまま」

• 体言止め。「流れている」を省略。

⑪ 「春にも夏にも、冬の日にも」

• 「秋」が抜けているが、「春夏、冬」と表現することによって、「一年中」、「いつも」、「いつでも」を表している。

⑫ 「川の声」

• 擬人法——「すずしい音」「さらさら」が「川の音」。

• 「川の音」は、耳に聞こえてくるもの。

• ノリオと川のつながり、ノリオの生活の中に川があった。

⑬ 「母ちゃんの生まれるもつと前、いや、じいちゃんの生まれるもつと前から」

• じいちゃん、母ちゃん、ノリオの三代以上の前から。

• ずっと昔から、その場所に川があって流れていた。

• ノリオと同様、じいちゃんも母ちゃんもその川と関わりを持って生活してきた。

• 子供言葉「じいちゃん」「母ちゃん」。

⑭ 「いっとき」

• わずかな時間。暫時。いちじ。

⑮ 「絶え間」

• 絶えている間。切れ間。

⑯ 「ひびかせてきたのだろう」

・ 「だろう」 ≡ 推量。

・ 推量しているのは語り手。

⑰ 「せせらぎのような」

・ 比喩法。

・ 「せせらぎ」 ≡ 浅い瀬などを水が流れる音。

⑱ 「なつかしい」

・ 愛着を覚えるさま。魅力的だ。人や物への思いを断ち切れな
いこと。

⑲ 「昔ながら」

・ 昔あったそのまま。

⑳ 「――」

・ 「聞かせてきたのだろう」。「ひびかせてきたのだろう」。

・ 余韻を残している。

・ ⑰⑱も語り手の考え。

・ 第一場面は、「プロローグ」。(前書き)

(3) 本時の目標

・ ノリオは、母ちゃんやじいちゃんの生まれるもつと前からす
ずしい音をたててさらさらと休まず流れる川の声を、聞いたこ

とが分かる。

・ 擬人法、擬音語、擬態語、子供言葉などが分かる。

(4) 板書

町外れ
行く

いなかびた
ぎ人法

ひと筋の流れ
・ 町のはしの方、町の中心から離れた所

すずしい音
・ いなからしい、静か、のどか

・ 細長い川の流れ
・ どこにでもある川、めずらしくもない川

・ すがすがしく感じられる音
・ 語り手の思い

さらさら
ぎ音語

休まず
・ はるか昔から

チロチロ
ぎ人法

茶わんのかげら
ぎ態語

しずめたまま
・ 落ち着きなく動く様子

春にも夏にも、
・ 人間の生活との結びつき

・ 「流れている」を省略

・ 一年中

冬の日にも

川の声

・いつも、いつでも

・ぎん法

・すずしい音、さらさら

・ノリオとのつながり

・子供言葉

母ちゃん、

じいちゃん

・川とのつながり

・わずかな時間、いちじ

いっとき

・語り手の思い

せせらぎ

・浅いせを水が流れる音

昔ながら

・昔あったそのまま

・間かせてきたのだから

・ひびかせてきたのだから

第一場面

・プロローグ（前書き）

(5) 発問

これから記述する発問は、教師が主導し教師の意図に沿って子供たちに発言させるためのものではない。私の授業は私の発問から始まるのではない。まず、子供たちの読み取りを優先させて発表させ、読み取れない所やもう少し深めて読んでほしい時、それに読み方や表現技法を教える時のみ発問するのである。従って、私の授

業には「課題」がない。私が先に枠を与えたり課題を提示したりしないで、まず子供たちが自分で読み取ったことを自分から話すようにした授業スタイルである。これから記述する発問は、子供たちが読み取っていれば不用な発問も含まれていることをまず断っておきたい。

(a) 「町外れ」とは、どのような所か。

(b) 「行く」というのは川が流れることだが、このような表現方法を何と言うか。

(c) 「いなかびた」とは、どういう意味か。また、どんな様子が想像できるか。

(d) 「ひと筋の流れ」を別の言葉で言い換えてみよう。また、それはどんな川か。

(e) 「すずしい音」とは、どのような感じの音か。また、それはどれがそう思っているのか。

(f) 「さらさら」は、何という表現方法か。

(g) 「休まず」を別の言葉で言い換えてみよう。また、このような表現方法を何と言ったか。

(h) 「チロチロ」は、どんな様子か。また、これは何という表現方法か。

- (i) 「茶わんのかげら」から、どんなことが分かるか。
- (j) 「しずめたまま」の後には、どんな言葉が省略されているか。
- (k) 「春にも夏にも、冬の日にも」からどんなことが分かるか。
- (l) 「川の声」を表す言葉はどれか。また、このような表現方法を何と言ったか。
- (m) 「母ちゃん、じいちゃん」のような言葉は、子供が使うことから、「子供言葉」と言われる。では、「母ちゃん、じいちゃん」は、何とつながりがあったのか。
- (n) 「いっとき」を別の言葉に言い換えてみよう。
- (o) 「だろう」とは、誰が思っているのか。
- (p) 「せせらぎ」とは、どのような音か。
- (q) 「昔ながら」を別の言葉に言い換えてみよう。
- (r) 「——」にどんな言葉が入るか。
- (s) 第一場面は、これから始まる話の前書きになっている。これをプロローグと言おう。
- (6) まとめ
- ・ ノリオの聞いた川の声、語り手の思い、表現の工夫などにふれて感想を書こう。

(1) 教材文(第二時)

① あったかい母ちゃんのはんてんの中で、ノリオは川の③においをか
② いた。

④ 母ちゃんの手が、せつせと動か⑤たびに、はんてんのえりもと⑥もせ
⑦ わしくゆれて、ほったの上のなみだのあとに、川風がすうすうと
⑧ ⑨ ⑩ 冷たかった。

⑪ 川つぶちの若いやなぎには、銀色の芽がもう大きかった。

⑫ 赤んぼのノリオのよこれ物を洗う、あったかい母ちゃんの背中
⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍

た町の上の広い広い空。母ちゃんの日に焼けた細い手が、きつくきつくノリオをだいていた。

ぬれたような母ちゃんの黒目に映って、赤とんぼがすいすい飛んでいった。川の上をどこまでも飛んでいった。

(2) 教材解釈

① 「あったかい母ちゃん」

・ 母ちゃんの体温の暖かさとノリオに対する温かさ。

② 「はんでん」

・ えりの折り返しや胸ひものない、羽織に似た短い上着。

・ 「ねんねこ(ばんでん)」 || 子供を背負うとき、上から着る

綿入れのはんでん。

・ 母ちゃんに負われていることから、ノリオは生後しばらくの

赤ん坊。(二才) —— 「また早春」で二才。

・ 母ちゃんのはんでんを着ているのは、早春の寒さからノリオ

を守ることに母ちゃんが一人でノリオの世話をしなければなら

なかったからであろう。

③ 「川のおいをかいだ」

・ プロロークでは「川の声を聞いた」、聴覚(耳) ↓ 臭覚(鼻)

・ 「かぐ」 || 鼻でおいを感じる。

・ 語り手の目がノリオの目と重なる。

・ おそらく、川とノリオの初めての出会いの場面であろう。

④ 「せっせと」

・ 擬態語。

・ 精出して。一生懸命に。

⑤ 「動く」

・ 後に「赤んぼのノリオのよごれ物を洗う」とあることから、

洗濯をしている手の動き。

⑥ 「えりもと」

・ 洋服や和服で、首の周りの部分。えりのあたり。

⑦ 「せわしく」

・ 忙しく。

⑧ 「なみだのあと」

・ ノリオがぐずって(だだをこねる) 泣いた跡。

⑨ 「すうすう」

・ 空気が通り抜けて冷たく感ずるさま。擬態語。

⑩ 「冷たかった」

・ 「母ちゃんの手が冷たかった」は、語り手の目がノリオと

重なっている。

⑪「川つぶちの若いやなぎには、銀色の芽がもう大きかった」

・ 「川つぶち」子供言葉。

・ 「川つぶち」の「やなぎ」から、「かわやなぎ（川柳）」。

・ 「かわやなぎ」＝ヤナギ科の落葉低木。水辺に叢生。高さ五十センチメートル～二メートル。春、葉より先に黄白色の花を穂状につけ、銀色の毛を密生。ねこやなぎ。

・ 早春の自然（情景）描写。

⑫「よこれ物を洗う」

・ おしめ、下着の類。

・ 川で洗濯をしていることから、川が生活の一部であったことが分かる。

⑬「あったかい母ちゃんの背中の中で、ノリオは川のおいをかいだ」

・ 「早春」の冒頭の文と同じ内容を繰り返して、「川のおいをかいだ」ことを強調。

・ ノリオと川の間わりは、「川のおいをかいだ」ことから初まる。

・ 冒頭の文との違い——「はんでんの」↓「背中の」。

⑭「土くさい、春のおこ」

・ 「土くさい」＝土のおいのする。

・ ノリオが初めてかいだ川のおいは、「土くさい、春のおい」であった。

⑮「すすきのほ」

・ 「すすきのほ」とあるから、ここからは「早春」ではなく秋。

⑯「旗をふった」

・ すすきの穂が風に吹かれて揺れる様子。擬人法。

・ 「旗」は「すすきのほ」を譬えている。比喩法。

・ にぎやかそうに見えるが、「すすきのほ」から、さみしさのイメージ。

⑰「ふさふさゆれる三角旗を」

・ 「ふさふさ」＝多く集まって垂れ下がるさま。擬態語。

・ 「三角旗」——三角の形に似た旗のよう——比喩法。

・ 前文とセットになって、倒置法。

・ 通常の文の順序

ア すすきのほが、川つぶちでふさふさゆれる三角旗をふった。

イ 「すすきのほ」を強調。

・ 「倒置」について（『国語教育研究大辞典』）

ア 三つの形

i 主語の位置と述語の位置を転倒

「くるしいのである。仕事が、」

ii 修飾語の位置と被修飾語の位置を転倒

「今度は突然、当時の作者仲間の事を話し出した。やっぱり細い銀の煙管をうすい唇の間で啣えながら。」

iii 独立語の位置を転倒

「久しぶりだね。君。」

イ 種類

i 文内倒置

ii 文と文との倒置

• この場合の倒置は、「修飾語の位置と被修飾語の位置を転倒」したものであり、「文と文との倒置」である。

⑮ 「旗の波」

• 比喩法——「旗」。「波」。

• 「波」から、すすきの穂が風に吹かれて、波のように揺れている様子。

⑲ 「真っ白いのぼりに送られて」

• 「のぼり」 || 「昇り旗」の略）丈が長く幅の狭い布の横に、多くの乳（ち）をつけ、竹に通し、立てて標識とするもの。
• 「真っ白いのぼり」は、戦地へ出征する人（兵士）を見送るときに使われたもの。

• ノリオの父ちゃんは、兵士として戦争に行ったことを表す。

• 「すすきのほ」と「真っ白いのぼり」が重ねて表現されていることは、人の世の出来事としてみれば「真っ白いのぼり」に送られて行ったことになるが、この表現からは川つぶちで旗を振るすすきの穂に送られて行くようなイメージと重なる。

⑳ 「行ってしまった」

• 戦争に行ったこと。出征したこと。

㉑ 「暗い停車場の待合室」

• 「停車場」 || 列車・電車が、乗客の乗り降り、荷物の積み下ろしのために止まる場所。「ていしゃば」とも言う。

• 「待合室」 || 駅や病院などで、待つ客のために作られた部屋。

• 「暗い」「待合室」から、ノリオの家族の幸せや平穏さが崩れていくことを暗示している。暗い、沈んだ雰囲気。

㉒ 「——」

• 出征していく父ちゃんの様子を、語り手が追憶している。

㉓ 「かたいてのひら」

• 力仕事に従事していたのであろう。

㉔ 「いっときもおもしろいように」

• ノリオとの別れを惜しむ、父ちゃんのせつない感情。

㉕ 「さすっていったっけ」

・ 「さずる」 Ⅱ 軽くこする。

・ 「け」 Ⅱ 過去の事柄を思い起こして、確かにそうだったと確認して言う。

・ 少しでもノリオに触れていたい、ノリオの感触をいつまでも忘れまいとする父ちゃんの思い。

・ 暗い停車場の待合室での父ちゃんの行為を、語り手がいとおしきをもつて追憶している表現になっている。

②⑥ 「父ちゃんを乗せていった貨物列車」

・ 父ちゃんが客車ではなく、貨物列車に乗せられて出征していったことから、人間が人並みに扱われていない戦争の非情さが伺われる。

②⑦ 「飼葉」

・ 馬や牛に食べさせるわらや干し草。

②⑧ 「すえたにおい」

・ 「すえる」 Ⅱ 食物がくさって、すっぱいにおいがする。(教科書の注)

・ 体言止め。「すえたにおい」を強調。「すえたにおい」のする貨物列車に人間を乗せていったという非情さの強調。やりきれなさ。

②⑨ 「ほほけた」

・ 「ほほける」 Ⅱ けばだつ。「ほおける」ともいう。(教科書の注)

・ 「けばだつ」 Ⅱ 細かい毛が起こり立つ。

・ すずきが風に吹かれて、互いにこすれあってほほけたものである。

③⑩ 「旗をふり」

・ 比喩法と擬人法。

③⑪ 「――」

・ 語り手の視点がすずきから、母ちゃんとノリオの方へ移動したことを表している。

③⑫ 「夕焼け空をながめていた」

・ 父ちゃんと別れ、取り残されたような二人である。さみしさが漂う二人であるが、ノリオには当然そんな状況は分からない。

③⑬ 「広い広い空」

・ 「広い」の繰り返しで、広さを強調。
・ 体言止め。「空」を強調。

・ 母ちゃんとノリオの置かれた「さみしさ」「暗い・沈んだ」状況と正反対の開放的な情景描写。

③⑭ 「日に焼けた」

・ 太陽の光にあたって、肌が黒くなる。

・ 外で働く時間が長く、働き者である。

③⑤ 「細い手」

・ やせて、力が弱い手。

③⑥ 「きつくきつく」

・ 「きつい」⇨加わっている力が強く、固い。

・ 繰り返して「きつく」を強調。

・ 親（父ちゃん）子が離ればなれになって暮らすさびしさと悲しさ、戦地へ行った夫の安否を気遣う母ちゃんは、それでもノリオをしっかり育てなければという強い決意が「きつくきつく」抱いているのである。

・ 母ちゃんの気持ちだが、「きつくきつく」という行動によって表現されている。

・ ノリオは、そんな母ちゃんの気持ちが分かるはずもなく、無心でいる。

・ 語り手は、そんな二人をいとおしみ、哀感を持って見ている。

③⑦ 「ぬれたような母ちゃんの黒目に映って、赤とんぼがすいすい飛んでいった」

・ 「ぬれたような」——比喩法。

・ 泣いてはいないが、「ぬれたような」という表現の中に、父ちゃんと別れたさびしさ・悲しさ、戦時中のこれからの生活で

ノリオを育てていく不安が込められているようである。

・ 「黒目」⇨眼球の中央の黒い部分。

・ 母ちゃんの黒目に映った赤とんぼを見ているということは、語り手が母ちゃんにうんと接近していることになり、テレビカメラのズームインした手法である。

・ 「すいすい」⇨気持ちよく軽そうに飛んだり泳いだりするさま。擬態語。

③⑧ 「どこまでも飛んでいった」

・ 「飛んでいった」の繰り返し。赤とんぼが軽やかに自由自在に飛ぶのに対し、母ちゃんの置かれた境遇は重苦しく辛いものである。

・ 前の文がズームインであるのに対し、赤とんぼが遠ざかるのを映すズームアウトの手法である。語り手が母ちゃんから一転して、赤とんぼを追っていることになる。

・ 「*」には、銀、白、黒、赤という色がどりが表現されている。

(3) 本時の目標

・ 早春にノリオは川のおいをかぎ、秋には父ちゃんが戦地へ行き、母ちゃんは悲しさ・辛さの中で強い決意を固めているこ

とが分かる。

- ・ 擬人法、擬音語、擬態語、子供言葉、比喩法、倒置法、繰り返し、行動による心情の表現などが分かる。

(4) 板書

はんでん

- ・ 羽おりににた短い上着
- ・ 生後まもない赤んぼノノリオ
- ・ 寒さから守る

- ・ 一人で世話

川のおい

- ・ 川との初めての出会い

せっせと

- ・ ぎ態語

なみだのあと

- ・ ぐずって泣いた

すうすう

- ・ ぎ態語

川つぶち

- ・ 子供言葉

若いやなぎ

- ・ 川やなぎ、ねこやなぎ

よこれ物

- ・ おしめ、下着

洗う

- ・ 川が生活の一部

川のおい

- ・ 土くさい、春において

すすきのほ

- ・ 秋

旗をふった

- ・ 風に吹かれてゆれている
- ・ 旗——比喩法

- ・ ふった——ぎ人法

ふさふさ

- ・ 多く集まって

- ・ にぎやか↓さみしさ

三角旗を

- ・ 比喩法

- ・ とう置法

旗の波

- ・ 旗、波——比喩法

真っ白いのぼり

- ・ 戦地へ行く人を見送るときの物

行ってしまった

- ・ 戦地、戦争に行った

暗い待合室

- ・ 暗く、しずんだふん囲気

- ・ 語り手が思い出している

- ・ 別れをおしむ、せつなさ

- ・ さわっていたい

- ・ はだざわりを忘れないように

- ・ 行動で思いを表現

- ・ け——思い出している || 語り手

- ・ 人並みにあつかわれていない

- ・ 戦争の非情さ

すえたにおい

- ・ やりきれなさ

——
広い広い空

きつくきつく

ぬれたような

黒目に映って

すいすい

どこまでも

飛んでいった

(5) 発問

(a) 「はんでん」とは、どのようなものか。また、母ちゃんはなぜはんでんを着ているのか。

・語り手の目が移動

・くり返し

・母ちゃんとノリオと正反対の世界

・くり返し

・さびしさ、悲しさの中の強い決意

・行動から思いの表現

・比喩法

・さびしさ、悲しさ、不安

・ズームイン||語り手の目

・ぎ態語

・ズームアウト||語り手の目

・くり返し

・赤とんぼ||軽く、自由な世界

・母ちゃん||重苦しく、つらい世界

・色どり

(b) 「ノリオは川のおいをかいだ」から、分かることは何か。

(c) 「せっせと」は、何という表現方法か。

(d) 「なみだのあと」があるのはなぜか。

(e) 「すすすう」は、何という表現方法か。

(f) 「川つぶち」は、何言葉だったか。

(g) 「若いやなぎ」とは、「かわやなぎ」とか「ねこやなぎ」と呼ばれる木のことである。

(h) 「よごれ物」とは何か。

(i) 「洗う」ということから、分かることは何か。

(j) 「川のおい」とは、どんなにおいか。

(k) 「すすきのほ」の季節は何か。

(l) 「旗をふった」とは、どのような様子か。また、このような表現方法を何と言ったか。

(m) 「ふさふさ」とは、どんな様子か。また、どんなことが感じられるか。

(n) 「三角旗を」は、前の文と合わせて何という表現方法か。また、「三角旗」は、何という表現方法か。

(o) 「旗の波」は、何という表現方法か。

(p) 「真っ白いのぼり」というのは、戦地へ行く人を見送るときのものである。

- (q) 「行ってしまった」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (r) 「暗い待合室」から、どんなことが感じられるか。
- (s) 「――」は、何を表しているか。
- (t) 「いっときもおしい」は、父ちゃんのどんな気持ちを表しているか。
- (u) 「さすっていたっけ」
- ア 父ちゃんのどんな気持ちを表しているか。
- イ 誰が思い出しているのか。
- ウ このような表現の仕方は、行動によって思いが分かるようになっていている。
- (v) 「貨物列車」「すえたにおい」から、戦時中のどんなことが分かるか。
- (w) 「――」は、誰の目が移動したのか。
- (x) 「広い広い空」は、母ちゃんやノリオ世界とどんな関係か。また、このような表現方法を何と言ったか。
- (y) 「きつくきつく」から、母ちゃんのどんな気持ち分かるか。また、このような表現方法を何と言ったか。
- (z) 「ぬれたような」から、母ちゃんのどんな気持ち分かるか。また、このような表現方法を何と言ったか。
- ä 「黒目に映って」は、語り手の目が母ちゃんに近づいたことで

あり、テレビカメラのズームインと同じである。

i 「すいすい」は、何という表現方法か。

ü 「どこまでも」は、語り手は赤とんぼが遠ざかるのを見ている。

テレビカメラのズームアウトと同じである。

ë 「飛んでいった」から、赤とんぼの世界と母ちゃんの世界を比べてみよう。また、このような表現方法を何と言ったか。

ö 「*」には、どんな色が出てくるか。

まとめ

(6)

まとめ

・ 早春に川のおいをかいだノリオ、戦地に行く父ちゃんの思い、父ちゃんを見送った母ちゃんの思い、表現の工夫などについて感想を書こう。

(1) 教材文(第三時)

① おいで、おいで。つかまえてごらん。

わたしは、だあれにもつかまらないよ。

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

④ 川の水がノリオを呼んでいる。白じらと波だって笑いながら。ノリオの新しいくりのげたが、片一方、ぶっかりと水にういた。⑥ ⑦ ⑧ ⑨

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

リオの知らない川下さして。¹⁰

ノリオは、もう片方のくりのげたも、夢中で川の上に投げてやっ
た。げたは、新しい裏を見せて、仲間のあとを追っかけていく。く
るくる、かっぶりことうかんだまま。¹⁴¹⁵

(おいで、おいでよ。おまえもおいで。¹⁶)

わたしは、だあれにもつかまらないよ。(

川はますます白い波をたてて、やさしくノリオに呼びかける。¹⁷

ノリオのはだしの片足が、ボチャリとすき通った水に入る。ひや
っと冷たい三月の水。²¹

冬スボンのすそをたくし上げて、ノリオは川をわたりだす。三月
の川の冷たさに、キヤッキヤッと一人笑いながら。²²²³²⁴²⁵

川はいつのまにか笑いをやめて、ひたひたとノリオを取り巻いた。²⁶²⁷

あとからあとから流れ寄せる銀色の水のまん中で、ノリオは、はっ
と立ちすくむ。²⁸²⁹³⁰³¹

ザアザアとおし寄せてくるこわい川。川は今ノリオをおし流して、

川下へさらっていくのではないか。ノリオのくりの木のげたのよう
に。³²³³³⁴³⁵³⁶³⁷

おびえてわあっと泣きかける時、だれかの手がノリオの体をひっ
とらえ、安全な川つぶちの砂の上に、ノリオは無事に引き上げられ

る。

流したはずのくりのげたも、ちゃんと二つ、川から取りもとされ、
ノリオは小さいおしりのはたに、母ちゃんのおしおきをうんともら
う。⁴²⁴³⁴⁴⁴⁵⁴⁶

(ノリオ、ノリちゃん、この悪ぼうず。今度川へなんぞ入ったら、
このおしりにやいとをすえてやろ……。)⁴⁷⁴⁸⁴⁹

(2) 教材解釈

① 「おいで、おいで。つかまえてごらん。わたしは、だあれにもつ
かまらないよ。」

・ 語り手の視点が、ノリオの目と重なっている。

・ ノリオにだけ聞こえる川の声であり、川とノリオの触れ合い
である。

・ 川の声を（ ）で表し、誘いかけるように二行に分け、上下
の変化で表現の工夫をしている。

・ 「おいで、おいで」——繰り返し。

② 「川の水がノリオを呼んでいる」

・ 擬人法。

・ ノリオには、川が呼んでいるように聞こえている。

・ 川は、川の中へとノリオを誘い込もうとしている。

③ 「白じらと波だって笑いながら」

・ 「白じら」 Ⅱいかにも白いさま。

・ 「波だって」 —— 「波立つ」 Ⅱ波が高くなる。

・ ノリオを誘い込むため、真っ白く波を高くして笑いながら。

・ 「笑いながら」 —— 擬人法。

・ ②③で倒置法。「川の水がノリオを呼んでいる」を強調。

・ 通常の文の順序

川の水が、白じらと波だって笑いながら、ノリオを呼んでいる。

④ 「ノリオの新しいくりのげた」

・ 川は、(おいで、おいで。)と川の中へ誘っているが、ノリオは入らずに、かわりに「新しいくりのげた」で呼びかけに応じている。

⑤ 「ぶっかり」

・ げたが重みで一度沈み、浮いてくる様子。 —— 擬態語。

⑥ 「手づくり」

・ 自分の手で作ること。
・ 戦時中で物が不足する中、じいちゃんがかわいい孫のノリオのために作ってやった栗の木のげた。

⑦ 「-----」

・ なのに。そんな大事な物を。

・ ノリオには、そんな大事な物という意識はない。(二才)

⑧ 「ぶっかぶっか」

・ げたが波によって、浮いたり沈んだりして流れる様子。

・ 擬態語。

⑨ 「くるくる」

・ 擬態語。

⑩ 「川下さして」

・ 後に「流れていく」が省略。

⑪ 「夢中で」

・ 「ぶっかりと水にう」き、「ぶっかぶっかと流れだ」し、「くるくる回って流れていく」のが、おもしろく、楽しい。

⑫ 「投げてやった」

・ 「川の上に投げた」のではなく、「投げてやった」ことから、川の呼びかけに応じたことになる。

⑬ 「げたは、新しい裏を見せて、仲間のあとを追っかけていく」

・ 擬人法。 —— 「見せて」「追っかけていく」

・ 「新しい裏」

ア 使い始めたばかりのげた。

イ 前の「片一方」のげたは表向き。

・ 「仲間」——「片一方」と「もう片一方」で二対。

⑭ 「かっぶりこ」

・ 波に揺られながら流れていく様子。擬態語。

⑮ 「うかんだまま」

・ 体言止め——げたの流れる様子を強調。

⑯ 「おいで、おいでよ。おまえもおいで。わたしは、だあれにもつかまらないよ。」

・ 二度目の誘いかけ。

・ 一度目との相違。

ア 「おいで」↓「おいでよ」

イ 「つかまえてごらん」↓「おまえもおいで」

・ 「よ」⇨命令・勧誘・願望・禁止など、相手にその実現を強く求める意を表す。

・ 「おいでよ」は、一度目よりも強い誘いかけとなっている。

・ 「おまえもおいで」は、くりのげたのように、ノリオを川の中へ誘い込もうとしている。

⑰ 「川はますます白い波をたてて、やさしくノリオに呼びかける」

・ 擬人法。

・ 「ますます」⇨前よりも一層。いよいよ。

・ 川は一度目の「白じらと波だって」よりも一層波を大きくして強く誘いかけてくる。

・ 「呼びかける」⇨言葉で人に働きかけて誘う。

・ 一度目は「呼んでいる」が、二度目には「呼びかける」となっており、誘いかけが強くなっている。

⑱ 「ボチャリ」

・ 擬音語。

⑲ 「水に入る」

・ 「おまえもおいで」という川の強い誘いかけに応じて、ノリオは川へ入っていく。

⑳ 「ひゃっと」

・ 「ひやりと」⇨冷たさを急に感じるさまを表す。擬態語。

㉑ 「三月の水」

・ 体言止め。早春三月の水の冷たさを強調。

㉒ 「冬ズボン」

・ 早春の三月の寒さのため、母ちゃんがノリオに冬ズボンをはかせている。

㉓ 「すそ」

・ 衣服の下の縁。衣服の脚にあたる所。

㉔ 「たくし上げて」

・ 「たくし上げる」 || 袖や裾などを手でまくり上げる。

・ スポンのすそが川の水にぬれないように。

②5 「わたりだす」

・ 前の文では「片足が」「水に入る」段階であったが、ここでは川の中へ入り込んでしまう。

②6 「キャッキョ」

・ 擬声語。

②7 「笑いながら」

・ 「笑いながら」の下に「わたりだす」が省略。

・ ノリオが川との触れ合いを楽しんでいる様子。

②8 「川はいつのまにか笑いをやめて、ひたひたとノリオを取り巻いた」

・ 擬人法。

・ 「いつのまにか」 || いつとということ知らぬ間に。

・ 「ひたひた」 || 水が浸すように、次第次第に迫ってくるさまを表す語。擬態語。

・ 川が「笑いをやめて」「ひたひた」と「取り巻いた」ことから、ノリオが川の中に取り残され孤立してしまったことになる。

②9 「あとからあとから」

・ ある事柄が次々と引き続いて起こるさま。繰り返し。

③0 「流れ寄せる」

・ 「寄せる」 || 迫り近づく。

・ 次から次へと川の流れが、ノリオに迫ってくる。

③1 「はっと」

・ 急に思い当たったり、思いがけない出来事があったりして、一瞬息をのむような緊張感を覚えるさま。擬態語。

③2 「立ちすくむ」

・ 立ったまま身動きできなくなる。

・ 「はっと立ちすくむ」は、ノリオが川の中にいることの不安を感じ取って、身動きできなくなったことを表している。

・ 語り手の視点が、ノリオの目と重なっている。

③3 「ザアザア」

・ 大量の水や砂・米など小粒の物が、勢いよく移動する音。

・ 大量の水が、ノリオに向かって勢いよく流れってくる音。

・ 擬音語。

③4 「おし寄せてくる」

・ 「おし寄せる」 || 多くのものが勢いよく近づいて来る。

・ 大量の水が、ノリオに向かって勢いよく流れ近づいて来る。

・ 「くる」とあることから、ノリオの目（語り手の視点と重なっ

て)から表現されている。

③5 「こわい川」

・ 体言止め。「川のこわさ」を強調。

・ ノリオの心象表現。

③6 「ないか」

・ 「か」||話し手の疑念を表す。

・ 語り手が、ノリオが「川下へさらわれてしまうのではないか」という疑いを持った表現になっている。

・ ノリオも「川下へさらわれてしまうのではないか」という不安を持つ。

③7 「ノリオのくりの木のげたのように」

・ 前の文とで倒置法。

・ 通常の文の順序

川は今ノリオをおし流して、ノリオのくりの木のげたのように、川下へさらっていくのではないか。

・ 「おし流して」「さらっていくのではないか」を強調。

③8 「おびえて」

・ 「おびえる」||こわがる。こわがって声を立てる。

③9 「わあっ」

・ 「わあ」||急にあげる大きな泣き声を表す語。擬音語。

④0 「だれか」

・ 語り手の視点が、ノリオの目と重なっているため、誰なのか語り手にもノリオにも分からない。

④1 「ひっとらえ」

・ 「引っとらえる」||「とらえる」を強めていう語。

・ 安全な場所へノリオを移すため、急いでやや乱暴に抱き上げている様子を表している。

④2 「川から取りもどされ」

・ くりの木のげたを流し、ノリオが川の中で立ちすくむまでの時間がそんなに長い時間ではなかったことが、この表現で分かる。

・ 母ちゃんは、ノリオのいる場所に近い所で見守っているのだから。

④3 「はた」

・ はし。(教科書の注)

・ 足の付け根に近い部分。

④4 「母ちゃん」

・ 前の文の「だれか」が、この文で母ちゃんだったことが分かる。

④5 「おしおき」

・ こらしめるための罰。

④ 「うんと」

・ たくさん。

・ あまり痛くない所（おしりのはた）に、痛くない程度の方がこらしめるために、たくさんたたいている。

④ 「ノリオ、ノリちゃん、この悪ぼうず」

・ ノリオに対して、愛情あふれる母ちゃんの呼びかけである。

・ 「悪ぼうず」は、おそろく川へ入らないように言い聞かせていたのに約束を守らなかったことを指しているであろう。

・ ノリちゃん——子供言葉。

④ 「川へなんぞ入ったら」

・ 「なんぞ」——くなんか。くなど。

・ 川へ入ることを戒めているのは、水による事故を防ぐことや

早春三月の寒さで風邪を引かせないためであろう。

④ 「やいと」

・ おきゅう。（教科書の注）

・ 「やいとをすえてやる」と言っているが、これは川へ入らないようにするためのおどしであり、愛情あふれる叱り方である。

(3) 本時の目標

・ ノリオは川の誘いに呼ばれて川の中に入るが、母ちゃんに引き上げられ、おしおきをされるのが分かる。

・ 繰り返し、擬人法、倒置法、擬音・声語、擬態語、子供言葉などが分かる。

(4) 板書

おいで、おいで

・ 川とノリオのふれ合い

・ ノリオだけに聞こえる

・ くり返し——させい

・ ()、上下

・ ぎ人法

呼んでいる

・ 川の中へとさそっている

・ ぎ人法

笑いながら

・ 前の文とどう置法

・ 「川の水が呼んでいる」を強調

ぶっかり

・ ぎ態語

・ 一度しずんでういてくる

手づくり

・ 戦時中——物が不足

・ かわいい孫のために

ぶっかぶっか

・ぎ態語

・波によってういたりしずんだり

くるくる

・ぎ態語

川下さして

・「流れていく」が省略

投げてやった

・川の呼びかけに応じて

新しい裏

・使い始め

・前の片一方は表向き

見せて

・ぎ人法

追っかけていく

かっぶりこ

・ぎ態語

・波にゆられて流れていく

うかんだまま

・げたの流れる様子を強調

おいでよ

・強いさそいかけ

おまえも

・くりの木のげたのように

・川の中へ

白い波をたてて

・ぎ人法

呼びかける

・一度目「呼んでいる」

ボチャリ

・ぎ音語

ひゃっと

・ぎ態語

三月の水

・「三月の水」の冷たさを強調

キヤッキヤ

・ぎ声語

笑いながら

・「わたりだす」を省略

笑いをやめて

・ぎ人法

取り巻いた

・ぎ態語

ひたひた

・水が次第にせまってくる

はっと

・ぎ態語

立ちすくむ

・不安

ザアザア

・身動きできない

ザアザア

・ぎ音語

ないか

・大量の水がノリオに向かって

げたのように

・語り手の疑い、不安

おびえて

・前の文とどう置法

わあっ

・こわがって

だれか

・ぎ音語

取りもどされ

・語り手とノリオの目の重なり

悪ぼうず

・語り手にもノリオにも分らない

悪ぼうず

・立ちすくんだのは長時間ではない

悪ぼうず

・母ちゃんはノリオの近くに

悪ぼうず

・愛情あふれる呼びかけ

悪ぼうず

悪ぼうず

川へなんぞ

やいと

- ・約束を守らなかつた
- ・くなんか、くなど
- ・水による事故、かぜ
- ・おどし
- ・愛情あふれるしかり方

(5) 発問

(a) 「おいで、おいで。」

ア 川の呼びかけは、川とノリオの何を表しているのか。

イ その呼びかけは、誰に聞こえるのか。

ウ その呼びかけには、どのような表現の工夫がされているか。

(b) 「呼んでいる」を別の言葉で言い換えてみよう。また、このよ
うな表現方法を何と言ったか。

(c) 「笑いながら」

ア 何という表現方法か。

イ 前の文と合わせて、何という表現方法か。

ウ 何を強調しているか。

(d) 「ぶっかり」とは、どんな様子か。また、これは何という表現
方法か。

(e) くりの木のげたは、なぜいいちゃんの手作りなのか。

(f) 「ぶっかぶっか」とは、どんな様子か。また、「ぶっかぶっか」

「くるくる」は、何という表現方法か。

(g) 「川下さして」の後には、何が省略されているか。

(h) 「投げた」ではなく、「投げてやった」から分かることは何
か。

(i) 「新しい裏」から何が分かるか。また、もう片一方はどちらを
向いていたか。

(j) 「見せて」「追っかけていく」は、何という表現方法か。

(k) 「かっぶりこ」とは、どんな様子か。また、何という表現方法
か。

(l) 「うかんだまま」は、何を強調しているのか。

(m) 「おいで」と「おいでよ」を比べてみよう。

(n) 「おまえも」の「も」は何と同じようになのか。また、どこへ
誘っているのか。

(o) 「白い波をたてて」「呼びかける」は、何という表現方法か。ま
た、「呼びかける」に対して、一度目は何と言っているか。

(p) 「ボチャリ」「ひゃつと」「キヤッキヤッ」はそれぞれ、何とい
う表現方法か。

(q) 「笑いをやめて」「取り巻いた」は、何という表現方法か。

(r) 「ひたひた」とは、どんな様子か。また、「ひたひた」「はっと」は何という表現方法か。

(s) 「立ちすくむ」とは、どんな様子か。

(t) 「ザアザア」とは、どんな様子か。また、何という表現方法か。

(u) 「ないか」とは、誰がどんなことを思っているのか。

(v) 「げたのように」は前の文と合わせて、何という表現方法か。

(w) 「おびえて」を別の言葉に言い換えてみよう。

(x) 「わあっ」は、何という表現方法か。

(y) 「だれか」とあるが、なぜ誰なのか分からないのか。

(z) 「取りもどされ」から、分かることは何か。

ä 「悪ぼうず」から何が分かるか。

i 「川へなんぞ」とあるが、母ちゃんは何を心配しているのか。

また、「なんぞ」を別の言葉に言い換えてみよう。

ü 母ちゃんは、なぜ「やいとをすえてやろ」と言うのか。この言い方から、母ちゃんの何が分かるか。

(6) まとめ

・ 川のさそいと呼ばれて川に入るノリオ、おびえて泣きかけるノリオ、母ちゃんにおしおきされるノリオと、表現の工夫などにふれて感想を書こう。

(1) 教材文(第四時)

川はしばらくだま^①まっている。

泣^②いている子供^③なんか知らないよ、というように、大根^④のかれっ葉^⑤

をうかべながら、すましこんでさらさら流れていく。

母ちゃんは「ハイキュー」に呼ばれていった。

ノリオは、塩^⑧っからいなみだのつぶを、ひりひりする手^⑨のこうで^⑩ふいてしまった。

川はまた、キラキラ笑^⑫いだす。笑^⑬ってノリオにさそいかける。

(おいで、おいでよ。つかまえてごらん。

おまえのげた^⑮のふね、流^⑯してごらん。)

げた^⑮はまた、くるくる流^⑰れていき、もう一度川の中に立ちすく^⑱ん

だノリオの体は、不意^⑲にまた現れた母ちゃんの手で、川^⑳つぶちの砂

の上に連れもどされる。

おしりのはたのおしおきも、もう一度^㉑。

川と、ノリオと、母ちゃんの、こんなひと続きの「追^㉒いかけっこ」

は、戦^㉓いの日の間^㉔続^㉕いていた。

母ちゃんは日^㉖に日^㉗にやつれたが、ノリオは何も知らなかった。あ

ったかい春の日^㉘ざしを浴^㉙びて、川と一日^㉚じゅう遊^㉛んで暮^㉜らす、ノリ

オは小^㉝さい神^㉞様^㉟だった。金色^㊱の光^㊲に包^㊳まれた、幸せな二才^㊴の神^㊵様^㊶だ

った。

(2) 教材解釈

① 「だまっている」

・ 擬人法。

② 「泣いてる子供」

・ 母ちゃんにおしおきされて泣いているノリオ。

③ 「知らないよ」⑤ 「うかべながら」⑥ 「すましこんで」⑦ 「流れていく」

・ 擬人法。

④ 「大根のかれっ葉」

・ 大根の枯れた葉で、使い物にならず捨てたものであろう。川が人間の生活と密接に結びついている。

⑥ 「すましこんで」

・ 「すます」⇒まじめそうな顔をする。気取る。

⑧ 「ハイキュー」

・ 戦争末期は物資が乏しく、衣類・食料などほとんどの日用品が割当制となり、家族の人数などに合わせて量も決められて、「配給」されていた。

・ 「」付きで片仮名なのは、戦時中での生活の一端を象徴的に表現したものと思われる。

⑨ 「ひりひり」

・ すりきずややけどなどで、皮膚が痛む感じ。
・ あかぎれによる痛さであろう。

⑩ 「手のこう」

・ 「こう」⇒手足のおもて。手足の上の方面。

⑪ 「ふいてしまった」

・ 「ふいた」ではなく、「ふいてしまった」のは無意識的にであろう。

⑫ 「キラキラ」

・ 「きらきら」⇒笑い声を立てるさま。けらけら。擬態語。

・ 笑って誘いかけることの強調のため片仮名。

⑬ 「笑いだす」⑭ 「さそいかける」

・ 擬人法。

⑮ 「おまえのげたのふね、流してごらん」

・ 二回目との比較。

「おまえもおいで」↓「おまえのげたのふね、流してごらん」
・ 一回目に流したくりの木を、もう一度流させることによつて、ノリオを川に引きつけようとしている。

・ 川がノリオに誘いをかける時は、いつも母ちゃんがそばにいない時。

・ 川は、げたをふねと見立ててノリオを誘う。

⑮ 「げたはまた、くるくる流れていき」

・ 川の「おまえのげたのふね、流してごらん」という誘いにのって、またげたを流している。これはノリオにとって、川との楽しい遊び。

⑯ 「不意にまた現れた母ちゃん」

・ 「不意」＝突然。だしぬけ。

・ 語り手の視点がノリオの目と重なるため、「不意に」となる。

・ 母ちゃんは配給に行ったが、恐らくまたノリオは川と関わりを持っていることを予測して戻ったのであろう。

⑰ 「もう一度」

・ 体言止め。おしおきをもう一度「うんともらう」ことを強調。

⑱ 「-----」

・ 「川がノリオを誘い、ノリオが川と遊び、母ちゃんに連れ戻される」という一連の流れが何度も繰り返されていることを表現している。

⑳ 「追いかっこ」

・ 子供言葉。語り手が一連の流れを「追いかっこ」と表現。

㉑ 「戦いの日の間」

・ 川とノリオと母ちゃんの「追いかっこ」は、平和な毎日でも楽しんで見えるが、実はそんな毎日でも戦争は続いていた。

㉒ 「日に日に」

・ 一日一日と。日ましに。日ごとに。

㉓ 「やつれた」

・ 「やつれる」＝やせほそる。やせおとろえる。

・ 父ちゃんのことを思い出し、じいちゃんの世話をし、ノリオの面倒を見、戦時中の物資の乏しい生活は厳しいものであり、母ちゃんの苦労は並大抵なものではなかった。

㉔ 「何も知らなかった」

・ ノリオはまだ二才。戦争のことも父ちゃんのことも母ちゃんの苦労も分かるはずがない。

㉕ 「日ざし」

・ 日光がさすこと。太陽の光線。

㉖ 「浴びて」

・ 「浴びる」＝（光・ほこりなどを）体に受ける。

㉗ 「小さい神様」

・ 比喩法。二才の小さいノリオは、神様のように天真爛漫であった。

・ 「天真爛漫」 Ⅱかざることなく、ありのままであること。むじゃきでくったくのない様子。

㊸ 「金色の光に包まれた、幸せな二才の神様だった」

・ 前文の意味内容を表現を変え、ノリオが神様のような毎日であったことを強調。

「金色の光に包まれた」 ↓ 「あったかい春の日ざしを浴びて」

「幸せな」 ↓ 「川と一日じゅう遊んで暮らす」

「幸せな二才の神様だった」 ↓ 「ノリオは小さい神様だった」

・ 川と、ノリオと、母ちゃんの「追いかけて」は、ノリオにとって最も楽しかった時であり、「金色の光に包まれた」毎日だったのである。

・ 語り手は二度も「神様」と表現して、ノリオの幸せを強調しているが、それはこの幸せが崩れていく伏線となっている。

(3) 本時の目標

・ 母ちゃんは日に日にやつれたが、ノリオは「追いかけて」を楽しむ、幸せな二才の神様だったことが分かる。

・ 擬人法、「」、片仮名、擬態語、子供言葉、比喩法などが分かる。

(4) 板書

だまっている

知らないよ

うかべながら

すましこんで

流れていく

泣いてる子供

大根のかれっ葉

すましこんで

「ハイキュウ」

キラキラ

笑いだす

さそいかける

不意

・ ぎ人法

・ おしおき

・ 人間の生活との結びつき

・ まじめそうな顔、気取って

・ 物が少なく、人数に合わせて配給

・ 戦時中の生活（「」とカタカナ）

・ 笑い声を立てる様子、けらけら

・ さそいかけの強調——カタカナ

・ ぎ態語

・ ぎ人法

・ 母ちゃんのいない時

・ とつ然、だしぬけ

・ 母ちゃんは予測

・ 一連の流れのくり返し

追いかけてっこ

・子供言葉

・一連の流れのこと

戦いの日の間

・戦争中での平和な毎日

やつれた

・やせほそる

・苦勞——父ちゃんのこと、じいちゃんのこと

世話、ノリオの面どう、戦時中の生活

小さい神様

・むじゃきでくったくがない、ありのまま

・比喩法

幸せな二才の神様

・最も楽しい日——伏線

(5) 発問

(a) 「知らないよ」「うかべながら」「すましこんで」「流れていく」

は、何という表現方法か。

(b) 「泣いてる子供」とは誰のことで、なぜ泣いているのか。

(c) 「大根のかれっ葉」から分かることは何か。

(d) 「すましこんで」を別の言葉で言い換えてみよう。

(e) 「ハイキュウ」というのは何か。また、「書きでカタカナ

はなぜか。

(f) 「キラキラ」

ア どんな様子のことか。

イ カタカナなのはなぜか。

ウ 何という表現方法か。

(g) 川が「笑いだす」「さそいかける」のは、どんな時か。また、この表現方法は何か。

(h) 「不意」を別の言葉で言い換えてみよう。また、母ちゃんは、なぜ不意に現れるのか。

(i) 「追いかけてっこ」とは何のことか。また、これは何言葉か。

(j) 「泣いてる子供」とは誰のことか。また、これは何言葉か。

(k) 「戦いの日の間」ノリオは、どんな毎日だったのか。

(l) 「やつれる」を別の言葉で言い換えてみよう。また、母ちゃんがやつれる理由は何か。

(m) 「小さい神様」とは、どんな様子を言っているのか。また、この表現方法は何か。

(n) 「幸せな二才の神様」

ア ノリオにとって、どんな毎日だったのか。

イ この表現は、この後の母ちゃんが帰ってこないという不幸な出来事の「伏線」になっている。

(6) まとめ

・ 日に日にやつれる母ちゃんと幸せな二才の神様であったノリオ、表現の工夫などにふれて感想を書こう。

(1) 教材文 (第五時)

悲し^① そうな役場のサイレンが、とぎれとぎれにほえだすと、この町にはなにごともなくつても、ノリオたちは穴倉に入らなければなら^②ない。

せみの声も川の音も聞こえない、しめっばい防空ごうの暗やみで、ノリオは出たいと、ぐずずって泣いた。

ふとおしつけた母ちゃんのむねが、とっきんとつきん、鳴っていたが、ノリオは穴倉の息苦しさに、暴れて出たいと泣きたてた。

母ちゃんと、やっと出て見た青空には、不思議なものが生まれていた。キラリ、キラリ、遠くなる光の点。そのあとに、せんに見た父ちゃんのたばこのけむりのような、白い筋がスルスルと生まれていた。

さざ波のあとのようにいく筋か、空の果てに並んでいるのもあった。

た。
B 29「-----」。

小聲で母ちゃんが言う。
ノリオは空の不思議な雲と、頭きんの中の母ちゃんの引きしまっ

た横顔を見比べていた。なぜかせみの声はやんでいて、川の音だけがはっきりと聞こえていた。

(2) 教材解釈

① 「悲しそうな」

・ サイレンの音を「悲しそう」と聞いているのは語り手であるが、「悲しそう」に聞こえるのは、戦時下でサイレンの音に逃げまどわざるを得ない人々の心情を思いやつのことであろう。

② 「サイレンがとぎれとぎれにほえだす」

・ 「とぎれとぎれにほえだす」||とぎれとぎれに鳴るサイレンは、空襲警報の合図。(教科書の注)

・ 今まさに空襲されつつあるという知らせ。

・ 長く「ウー」と続くと、敵の飛行機(B 29)が近づきつつあるという警戒警報。

・ 「ほえだす」——擬人法。

③ 「穴倉」

・ 次の文に出てくる「防空ごう」のこと。

④ 「入らなければならぬ」

・ 空襲警報のサイレンが鳴った時は、「防空壕」に逃げ込むよう定められていたのである。「なければならぬ」というのは、責任・義務があることを表す。

⑤ 「せみの声も川の音も聞こえない」

・ 「せみ」は夏の象徴、「川の音」はノリオの生活との密接な関わりを持つ音。その両方が聞こえない沈黙の世界。

⑥ 「しめっばい」

・ じめじめする。

⑦ 「防空ごう」

・ 空襲の時に避難するため、土を掘って作った穴。

⑧ 「暗やみ」

・ 暗いこと。

⑨ 「ノリオは出たい」

・ 何の音も聞こえず、じめじめした暗い防空壕は、戦時下の生活が理解できない二才のノリオにとって、窮屈で不愉快な閉ざされた世界であった。

⑩ 「くずって」

・ 「くずる」 || だだをこねる。わがままを言う。

⑪ 「とっきんとっきん」

・ 語り手の視点がノリオの目と重なる。擬音語。

・ 「とっきんとっきん」は、母ちゃんの心臓の音だが、沈黙の世界の中で泣くノリオに心を痛めて、さもあやしている音のようにも思える。

・ ノリオにとって、母ちゃんの生きていたあかしの伏線になっている。

⑫ 「息苦しさ」

・ 「息苦しい」 || 呼吸するのが苦しい。

・ 防空壕の中のしめっばいと人いきれのためであろう。

⑬ 「泣きたてる」

・ 「泣きたてる」 || 声をたてて泣く。盛んに泣く。泣きわめく。

⑭ 「見た青空」

・ 語り手の視点がノリオの目と重なっている。

⑮ 「不思議なもの」

・ ノリオにとって初めて見るもの。何であるかは、勿論ノリオは知らない。

⑯ 「キラリ、キラリ、」

・ 「きらり」 || 瞬間的に光るさま。擬態語。

・ 「キラリ」の下にいずれも読点があることから、連続的に光るのではなく、非連続的に光る。

・ 本来は平仮名であるが、片仮名になっているのは、強調される

ているからである。

⑰ 「遠くなる光の点」

・ B 29が遠ざかって点のようになり、それが光る。

・ 体言止め。——強調。

⑱ 「せんに」

・ 前に。(教科書の注)

⑲ 「けむりのような」

・ 比喩法。

⑳ 「白い筋」

・ 飛行機雲。

㉑ 「スルスル」

・ よくのびる様子。

・ 擬態語。——片仮名。——強調。

㉒ 「さざ波のあとのように」

・ 「さざ波」||小さな波。比喩法。

㉓ 「いく筋か、空の果てに並んでいる」

・ 飛行機雲がいくつもあるということ、B 29が数多く飛んでいる

ことになる、空襲の激しさを物語っている。

㉔ 「B 29」

・ アメリカ軍のばくげき機。(教科書の注)

②⑤ 「-----」

・ 戦いの激しさを感じ、空襲の恐ろしさ、不安、また、父ちゃんの安否を気遣う母ちゃんの思い。

②⑥ 「小声で」

・ ノリオに言い聞かせているのではなく、「-----」の思いからの一人言であろう。

②⑦ 「頭きん」

・ 「防空頭巾」||空襲の時に、弾片などの飛来物から頭部を防護するための綿入りの頭巾。

②⑧ 「引きしまった」

・ 「引き締まる」||心がしまる。緊張する。

②⑨ 「見比べていた」

・ 母ちゃんの思いを知る由もないノリオだが、不思議な雲と母ちゃんの緊張した横顔を見比べて、異様な情景を無意識のうちに感じ取っていたのであろう。

③⑩ 「なぜかせみの声はやんで」

・ サイレンの音は鳴りやみ、B 29も光の点になっているのに、なぜかせみの声がない。せみたちは、まだ異様な世界から解放されていないのであろう。

③⑪ 「川の音だけがはっきりと聞こえた」

- ・ 異様で静寂な中でも、川はいつときも休まず音をたてて流れている。川は戦争への怒りも何も示さずに流れているに過ぎない。しかし、それだけに、戦争の非情さが浮き出てくる感じである。

(3) 本時の目標

- ・ 防空ごうから外へ出たいと泣くノリオ、外の青空のB29の飛行機雲を見て緊張する母ちゃん、そんな中でも川は音を立てて流れていることが分かる。
- ・ 擬人法、擬音語、読点、片仮名、擬態語、比喩法などが分かる。

(4) 板書

悲しそう

- ・ 語り手の思い

とぎれとぎれ

- ・ 戦時中の生活
- ・ 空襲警報
- ・ 空襲されている知らせ

ほえだす

- ・ ぎ人法

防空ごう

- ・ 空襲の時にひ難する穴

ぐずって

泣きたてた

とっきんとっきん

不思議なもの

キラリ、キラリ、

- ・ だだをこねる、わがまを言う

- ・ さかんに泣く、声をたてて泣く

- ・ ぎ音語

- ・ 初めて見るもの——ノリオ

- ・ 読点——非連続

- ・ カタカナ——強調

光の点

たばこのけむりの

ような白い筋

スルスル

- ・ 飛行機雲

- ・ 比喩法

- ・ よくのびる様子

- ・ カタカナ——強調

さざ波のあとの

ように

並んで

- ・ 小さい波

- ・ 比喩法

- ・ 空襲の激しさ

- ・ 空襲のおそろしさ

- ・ 父ちゃんの無事

- ・ 一人言

頭きん

- ・ 防空頭きん

見比べて

- ・ 異様な情景
- ・ 無意識に

川の音だけ

- ・ 静かな中での音
- ・ 戦争と関わりなく流れる

(5) 発問

- (a) サイレンの音を「悲しそう」と思っているのは誰か。また、なぜ「悲しそう」に思えるのか。
- (b) 「とぎれとぎれ」に鳴るサイレンは、空襲警報の合図だが、空襲警報とは何か。また、「ほえだす」は、何という表現方法か。
- (c) 「防空ごう」というのは何か。
- (d) 「くずって」「泣きたてた」とあるが、それぞれ別の言葉で言い換えてみよう。
- (e) 「とっきんとっきん」は、何という表現方法か。
- (f) 「不思議なもの」は、ノリオにとってどういうものであったか。
- (g) 「キラリ、キラリ、」
- ア 「キラリキラリ」と比べて、二つの読点から分かることは何か。
- イ 「きらり、きらり、」ではなく、カタカナなのはなぜか。

ウ 何という表現方法か。

(h) 「光の点」とは何のことか。

(i) 「たばこのけむりのような白い筋」とは、何のことか。また、

何という表現方法か。

(j) 「スルスル」

ア どのような様子を表しているか。

イ 「するする」ではなく、カタカナなのはなぜか。

ウ 何という表現方法か。

(k) 「さざ波のあとのように」とあるが、「さざ波」とはどのような波か。また、何という表現方法か。

(l) 空の果てに「並んでいる」から、分かることは何か。

(m) B 29の後の「……」は、母ちゃんのどんな思いか想像しよう。

(n) 母ちゃんの「小声で」は、ノリオに言ったのか。

(o) 「頭きん」とは、どのような物で、何のためか。

(p) ノリオが「見比べて」たのはなぜか。また、それはどのような思いからか。

(q) 「川の音だけ」が聞こえることから、分かることは何か。

(6) まとめ

- ・ 外へ出たいと泣くノリオ、飛行機雲を見る母ちゃんの思い、

川の音だけが聞こえること、表現の工夫などにふれて感想を書こう。

(1) 教材文(第六時)

母ちゃんが、お米①——しようとかえてきたノリオの黒いゴムぐつを、川はたぶたぶ流③していった。

ノリオのまっさらの麦わらぼうしも、川はぶかぶか流⑤していった。ノリオの黒いパンツ⑥まで、川は流してしま⑦ったが、すぐにそんな物を取りもどして、ノリオのおしりにおおきする母ちゃんが、今日⑦は、来なかつた。

黒いゴムぐつは帰⑧ってこない。

麦わらぼうしも帰⑧ってこない。

黒いパンツも、行⑨ったきり——

*

ノリオは遊びつかれていた。

朝のうち、ドド——ンとひびいた何かの音に、一べんだけじい

ちゃんに連れもどされたほかは、一日じゅう川の中にノリオはいた。

ねむたく、暗いような目の前に、赤や青の輪がぐるぐるする。

夕暮れの川はまぶしかつた。

ノリオは生ぬるい水の中を、つかれはててジャブジャブわたりな

がら、ザアザア高まる川音の中に、ただ、母ちゃんを待っていた。⑲
なにもかも、よくしてくれる母ちゃんのお手。びしゃり、とおしりをぶつ、あつたかいあの手⑳。

*

夜が来て、ノリオは家へ帰ったが、母ちゃんもどってはいなかつた。

近所の人㉑が、せわしく出入りする。

おそろしそうな、人々のささやきの声。

ノリオの母ちゃんは、この日の朝早く汽車に乗って、ヒロシマへ

出かけていったという。

黒いきれを垂らした電灯の下に、大人たちの話が続いていた。

じいちゃんが、夜おそく出かけていった。

(2) 教材解釈

① 「お米——しようとかえてきた」

・ 「お米」——食べ物不足の中で、米は貴重品。

・ 「一しよう」＝しよは容積の単位。一しよは約一・ハリツトル。(教科書の注)

・ 「かえてきた」——物々交換。

・ 貴重品の米とゴムぐつを物々交換するということから、母ちゃんは川遊びの好きなノリオを大事に育てていたことが分かる。

② 「ゴムぐつ」

・ 幼い子供にとって、下駄よりもゴムぐつの方が、履きやすいこと、川へ入っても歩きやすいこと、怪我をしにくいことなどを母ちゃんは考えたのであろう。

③ 「たぶたぶ」

・ 「だぶだぶ」に同じ。水などが音をたてて揺れる様子。

・ 擬態語。

・ ノリオは、いつものように川の誘いによって、ゴムぐつを流してしまっただけであらう。

④ 「まっさら」

・ 新品。(教科書の注)

⑤ 「ぶかぶか」

・ 物が軽そうに水に浮いている様子。浮いているのは、「麦わらぼうし」だから「ぶかぶか」。擬態語。

⑥ 「黒いパンツまで」

・ 川に誘われるまま「黒いゴムぐつ」「麦わらぼうし」を流した。いつもこのあたりで現れる母ちゃんが来ない。それで「黒いパンツ」まで流してしまう。

⑦ 「今日は、」

・ 読点による強調。——「今日」。

⑧ 「帰ってこない」

・ 繰り返して「帰ってこない」を強調。

⑨ 「行ったきり……」

・ 「……」は「帰ってこない」を省略。句点がないのは、どこまでも流れていってしまうことを表している。

・ 「行ったきり」で「帰ってこない」は、「母ちゃんも」を暗示している。

⑩ 「朝のうち、ドド……ンとひびいた何かの音」

・ 原爆が広島上空で爆発したのは、八月六日の午前八時十五分。

・ この頃に、もうノリオは川にいた。

・ 語り手にもその音が何の音か分からず「何かの音」。

・ ノリオの住む町にも音だけが響いてきた。

⑪ 「じいちゃんに連れもどされた」

・ この表現からも母ちゃんがいなことが分かる。

・ 「何かの音」に驚き、ノリオが心配になって、じいちゃんが

迎えにきたのであろう。

⑫ 「一日じゅう」

・ 朝の八時頃から夕方まで川にいたわけだから、前の文の「遊
びつかれていた」はずであり、川遊びは疲労が大きい。

⑬ 「ねむたく、暗いような目の前」

・ 疲れ果てて極限状態にあるノリオ。

・ 語り手の視点が、ノリオの目と重なる。

⑭ 「赤や青の輪」

・ 夕日が川の水に反射している状況であろう。

⑮ 「ぐるぐる」

・ 物が回る様子。擬態語。

⑯ 「まぶしかった」

・ 前の文の「赤や青の輪がぐるぐるする」状況のこと。

⑰ 「ジャブジャブわたりながら」

・ 「ジャブジャブ」|| 水の中を歩く音。擬音語。

・ いつも母ちゃんが来てくれるのは、ノリオが川の中にいる時。

川の中で母ちゃんを待っている。

⑱ 「ザアザア高まる川音の中に」

・ 「ザアザア」前出。

・ ノリオが置かれている状況の暗示と共に、ひたすら母ちゃん

を待つノリオの不安な気持ちを表す表現。

⑲ 「ただ、」

・ 読点の強調。ひたすら母ちゃんを待つことの強調。

⑳ 「なにもかも」

・ 何事も。すべて。

㉑ 「よくしてくれる」

・ 十分にしてくれる。

㉒ 「あの手」

・ 体言止め。——「手」の強調。

㉓ 「びしゃり」

・ 平たい物同士を強く打ちつける音の形容。擬態語。

㉔ 「あの手」

・ 繰り返して強調。

㉕ 「-----」

・ 手を通して、母ちゃんをひたすら待ち、母ちゃんをひたすら

思うノリオの気持ちが表れており、待ち続ける様子や気持ちが

句点なしの表現になっている。

㉖ 「夜が来て、ノリオは家へ帰った」

・ ノリオは疲れ果てていたが、夜が来るまで川の中で母ちゃん
を待っていたのであろう。

・ 帰りながら、家には母ちゃんがきつといるとの思いを持って
いたのである。

・ じいちゃんが迎えに来なかったのは、母ちゃんの帰りを家で
待っていたからであろう。

②7 「せわしく」

・ 「せわしい」＝忙しい。

②8 「出入り」

・ 出たり入ったり。

・ 近所の人たちが、ノリオの母ちゃんを心配して、ノリオの家
を訪れている。

②9 「おそろしそうな、人々のささやきの声」

・ 「おそろしい」＝こわい。

・ 「ささやく」＝声をひそめて話す。

・ 体言止め。「ささやきの声」を強調。

・ 近所の人たちは、じいちゃんから母ちゃんが広島へ行ったこ
と、その広島には原爆が落ちたことを知り、原爆の怖さやノリ
オの母ちゃんの安否に、声をひそめて話していたのであろう。

③0 一行あき

・ 母ちゃんが朝早く広島に出かけていったことを、語り手が読
者に知らしめるためであろう。

③1 「朝早く」

・ ノリオが朝から川へ来ていたのは、母ちゃんがいなかったから。

・ 母ちゃんは原爆に遭遇したことが、この文から分かる。

③2 「ヒロシマ」

・ 広島。(教科書の注)

・ 片仮名で表記する場合は、「被爆地」としての広島を表すこ
とが多い。

③3 「黒いきれを垂らした電灯の下」

・ 戦争中は空襲に備えて、電灯の光が外にもりないようにして
いた。(教科書の注)

③4 「大人たちの話が続いていた」

・ ノリオは大人たちの話から、母ちゃんのもどらないことに言
い様のない不安を感じていたのであろう。

③5 「出かけていった」

・ 母ちゃんの安否を訪ねて、広島へ出かけていったことが推測
されるが、このことは後の「また、八月の六日が来る」の中で
記述されている。

(3) 本時の目標

・ 黒いゴムぐつも麦わらぼうしも黒いパンツも、それを取り戻

してくれる母ちゃんもヒロシマへ出かけたきり、帰らなかったことが分かる。

・ 擬態語、読点、繰り返し、「……………」、擬音語などが分かる。

(4) 板書

お米

・ 貴重品

かえてきた

・ 物物交かん

・ ノリオを大事に

黒いゴムぐつ

・ はきやすい、けがをしにくい

川の中でも歩きやすい

たぶたぶ

・ 水が音をたててゆれる様子

・ ぎ態語

ぶかぶか

・ 軽そうに水にうく様子

・ ぎ態語

今日は、

・ 読点による強調

帰ってこない

・ くり返し

行ったきり……………

・ 「帰ってこない」を省略

・ どこまでも流れていく

・ 「母ちゃんも」を暗示

朝のうち、ドド……原ぼくのぼく発

ンとひびいた何かの 八月六日午前八時十五分

音 音 ・ ノリオは川に

じいちゃんに連れ

もどされた

ねむたく、暗い ・ つかれはてて

ような目の前

ぐるぐる ・ ぎ態語

ジャブジャブ

わたりながら ・ ぎ音語

ザアザア高まる ・ 川の中にいないと母ちゃんは来ない

川音の中

ただ、 ・ 不安が増す

あの手 ・ 読点の強調

・ 「手」の強調

ぴしゃり

…………… ・ くり返し

夜が来て ・ ぎ態語

せわしく ・ 母ちゃんを待つ思い

出入り ・ 夜まで母ちゃんを待っていた

・ いそがしく

・ 母ちゃんのことを心配して

おそろしそうな

・原ばくのこと

ささやきの声

・母ちゃんのこと

朝早く

・原ばくの落ちたころ

ヒロシマ

・ひばく地の広島——カタカナ

大人たちの話

・言いようのない不安

出かけていった

・広島へ

・母ちゃんをさがしに

(5) 発問

(a) 食べ物が不足していた戦時中、「お米」は特に貴重品であった。

その「お米」と交かんしたのが「黒いゴムぐつ」であった。これを物物交かんと言う。そんな貴重な「お米」と「黒いゴムぐつ」とを交かんしたということから、分かることは何か。

(b) 母ちゃんが、ノリオのために「黒いゴムぐつ」を履かせたのはどんな理由からか。

(c) 「たぶたぶ」「ぷかぷか」は、それぞれどんな様子を表現しているか。また、それぞれどんな表現方法か。

(d) 「今日は」と「今日は」とを比べてみよう。
「帰ってこない」が二度出てくるがなぜか。また、このような

表現方法を何と言ったか。

(f) 「行ったきり……」

ア 「行ったきり」の下に何が省略されているか。

イ 「……」の下に句点がないのはなぜか。

ウ 「帰ってこない」「行ったきり」は、「黒いゴムぐつ」「麦わらぼうし」「黒いパンツ」以外の何を予想させるか。

(g) 「朝のうち、ドド……ンとひびいた何かの音」とあるが、広島で原ばくがばく発したのが、八月六日の午前八時十五分であった。この頃、ノリオはどこにいたか。

(h) 「じいちゃんに連れもどされた」ことから、分かることは何か。

(i) 「ねむたく、暗いような目の前」のノリオは、どんな様子だったのか。

(j) 「ぐるぐる」「ジャブジャブ」は、何という表現方法か。

(k) ノリオは川の中を「わたりながら」とあるが、なぜ川の中をわたっていたのか。

(l) 「ただ」と「ただ」を比べてみよう。

(m) 「あの手」が二度出てくるが、このような表現方法を何と言ったか。また、なぜ二度も出てくるのか。

(n) 「びしゃり」は、何という表現方法か。
(o) 「あの手」の下の「……」は、何を表しているのか。また、

句点がないのはなぜか。

- (p) 「夜が来て」とあるが、ノリオは何をしていたのか。
- (q) 「せわしく」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (r) 近所の人が、ノリオの家に「出入り」するのはなぜか。
- (s) 近所の人が「おそろしそうな、ささやきの声」は、何を話題にしていると考えられるか。
- (t) ノリオの母ちゃんがヒロシマへ行ったことが述べられている文の前後が「行あきになっているのはなぜか。
- (u) 「朝早く」は、ヒロシマでは何があった頃か。
- (v) 広島を「ヒロシマ」とカタカナで書く場合は、被ばく地としての広島を表すことが多い。
- (w) 「大人たちの話」を聞いているノリオは、どんな思いだったか。
- (x) じいちゃんは、どこへ何をしに「出かけていった」のか。
- (y) まとめ
- ・ 黒いゴムぐつなど川に流して帰ってこないこと、ノリオは一日じゅう母ちゃんを待っていたこと、母ちゃんがヒロシマに出かけたこと、表現の工夫などにふれて感想を書こう。

(1) 教材文（第七時）

おぼんの夜（八月十五日）^①

前に死んだ、ばあちゃん②の仏だんに、新しいぼんち③ょうちんが下がっている。

じいちゃん④はきせるをみがいている。ジュエツ⑤と焼けるくさいや⑥に⑦におい。

ときどき、じいちゃん⑧の横顔が、へいけがにのように、ぎゅっとゆがむ。⑨ごま塩のひげががすかにゆれて、ぽっとり、ひざに⑩しずくが落ちる。

*

母ちゃんのもどってこないノリオの家。^⑩

じいちゃん⑪がノリオの雑すいを⑫たいた。

ぼうと⑬明るいくどの火の中に、げた作りのじいちゃん⑭の節くれ

だった手⑮が、ぶるぶる⑯ふるえて、まき⑰を入れる。

ぼし⑱やぼし⑲と白くなった、じいちゃん⑳のかみ。

ノリオは、じいちゃん㉑の子になった。たばこ㉒くさいじいちゃん㉓にだかれてねた。

(2) 教材解釈

①「八月十五日」

- ・ この日に戦争が終わる。

②「ばあちゃん」

- ・ 子供言葉。

③「新しいぼんちようちん」

- ・ 「ぼんちようちん」の挿し絵（教科書の注）
- ・ 供養のために吊すちようちん

- ・ 「新しい」ということから、母ちゃんの供養のため、即ち母ちゃんは亡くなったことを表している。

④「きせる」

- ・ きざみたばこをつめて吸う道具。

⑤「ジュース」

- ・ 擬音語。

⑥「やに」

- ・ たばこの成分でできる粘液。

⑦「におい」

- ・ 体言止め。——「におい」の強調から、さびしさ。悲しさ。

⑧「じいちゃんの横顔が、へいけがにのように、ぎゅっとゆがむ」

- ・ 「へいけがに」——挿し絵（教科書の注）ヘイケガニ科のかに。こうらの表は人の顔に似ている。瀬戸内海方面に多く、平

家一族の亡霊が化したものという。

- ・ 「へいけがにのように」比喩法。

- ・ 「ぎゅっ」|| ひどい苦しみ。絶望のさまなどを表す。擬態語。

- ・ 「ゆがむ」|| 整った形がねじれて曲がる。

- ・ 帰ってこない父ちゃん、亡くなった母ちゃん、残された孫のノリオのことを思い、深い悲しみにじっと耐えるじいちゃんの気持ち、その表情によって表現されている。

- ・ ノリオの母ちゃんもういない。こんな小さいノリオなのに。なんてかわいそうな子なんだ。せめて父ちゃんが帰ってきてくれたら。

⑨「こま塩のひげがかすかにゆれて、ぼっとり、ひざにしくが落ちる」

- ・ 「こま塩」|| 黒と白のまじったもの。特に、頭髮、ひげなどの、黒毛と白毛の入りまじったものをいう。比喩法。

- ・ 「ぼっとり」——「ぼとりと」|| しずくや物が軽く落ちる様子。擬態語。

- ・ 「しく」は涙のこと。

- ・ この文もじいちゃんの深い悲しみを行動から表現したものの。

⑩「ノリオの家」

- ・ 体言止め。さびしいノリオの家を強調。

・ じいちゃんと二人だけのさびしい家。火の消えたようなノリオの家。

⑪ 「雑すい」

・ 野菜などをきざみこみ、みそやししょうゆで味をつけたかゆ。
・ 母ちゃんがいないため、幼いノリオを無事に大事に育てたいと世話をしている。

⑫ 「ぼうっと」

・ 物の姿・形がぼやけているさま。擬態語。

⑬ 「くど」

・ かまど。(教科書の注)

⑭ 「節くれだった手」

・ 「節くれだつ」|| 関節がふくれて、ごつごつしている。

⑮ 「ぶるぶるふるえて」

・ 「ぶるぶる」|| 体などが小刻みに震えるさま。擬態語。
・ この表現も行動を描くことで、じいちゃんの深い悲しみを表している。

⑯ 「ぼしゃぼしやと白くなった、じいちゃんのかみ」

・ 「ぼじゃぼじゃ」|| 髪の毛の乱れたさま。くしゃくしゃ。擬態語。
・ 「ぼさぼさ」|| 頭髮の乱れているさま。
・ 「じいちゃんのかみ」体言止め。強調。

・ 「ぼしゃぼしやと(して)白くなった、じいちゃんのかみ」で、(して)が省略してあると思われる。

・ 毎日の生活に追われ、髪の毛はくしゃくしゃで、苦勞のためになお一層白くなったじいちゃんの髪。

⑰ 「じいちゃんの子」

・ ノリオを育ててくれる大人は、じいちゃんしかいない。

⑱ 「だかれてねた」

・ 幼いノリオが不憫でならないじいちゃんは、一人寝をさびしげらないように、しっかりと抱いて寝てやっている。

(3) 本時の目標

・ 涙がひざに落ちるじいちゃんの悲しみと、ノリオはじいちゃんの子になったことが分かる。

・ 子供言葉、擬音語、比喩法、擬態語、行動(表情)による心情の表現などが分かる。

(4) 板書

八月十五日
戦争終了日
ばあちゃん
子供言葉

新しいぼんちよう

ちん

ジュース

におい

へいけがにの

ように

ぎゅっ

ゆがむ

ぼっとり

しづく

・なくなった母ちゃんの供養

・ぎ音語

・さびしさ、悲しさの強調

・比喩法

・ぎ態語

・悲しみにたえる

・表情から気持ち

・ぎ態語

・なみだ

・深い悲しみ

・行動から気持ち

・さびしいノリオの家を強調

・無事に、大事に育てたい

・ぎ態語

・関節ふくれて、ごっこつ

・ぎ態語

・深い悲しみ

・行動から気持ち

ぼしゃぼしゃ

・ぎ態語

・ぼさぼさ、くしゃくしゃ

じいちゃんのかみ

・苦労のためより白くなったかみを強調

じいちゃんの子

・育ててくれるのはじいちゃんだけ

だかれてねた

・さびしがらないように

・しっかりだいて

(5) 発問

(a) おぼんの「八月十五日」は、戦争が終わった日でもある。

(b) 「ばあちゃん」のような言葉を何と言ったか。

(c) 「新しいぼんちようちん」は、誰のものか。

(d) 「ジュース」は、何という表現方法か。

(e) 「におい」は、じいちゃんの何を強調しているか。

(f) 「へいけがにのように」「ぎゅっ」は、それぞれ何という表現方法か。

方法か。

(g) じいちゃんの「ゆがむ」表情から、じいちゃんの悲しみが分かる。このように行動（表情）から気持ちを表現する方法が取られている。

ている。

(h) 「ごま塩」「ぼっとり」は、それぞれ何という表現方法か。

- (i) 「しずく」は何を表し、じいちゃんのどんな気持ちが分かるか。また、これはどのような表現方法か。
- (j) 「ノリオの家」と言い切っているのは、何を強調しているのか。
- (k) じいちゃんが「雑すい」をたくのは、どんな思いからか。
- (l) 「ぼうっと」は、何という表現方法か。
- (m) 「ぶるぶる」から、じいちゃんのどんな気持ちが分かるか。また、何という表現方法か。
- (n) 「ぼしゃぼしゃ」を別の言葉で言い換えてみよう。また、何という表現方法か。
- (o) 「じいちゃんのかみ」は、何を強調しているか。
- (p) 「じいちゃんの子」とは、どういう意味か。
- (q) ノリオは「だかれてねた」とあるが、じいちゃんはどんな思いで抱いて寝たのか。
- (6) まとめ
- ・ じいちゃんの表情や行動から気持ちを押さえ、表現の工夫にもふれて感想を書こう。
- (1) 教材文（第七・八場面、第八時）
- ① あらしが過ぎた。

川っぶちの雑草のしげみのかけで、^②こおろぎが昼間も、リリリリと鳴いた。^⑤

すずきがまた、銀色の旗をふり、父ちゃんが戦地から帰ってきた。^⑥

父ちゃんは小さな箱だった。^⑦

じいちゃんが、う、うっと、させるをかんだ。^⑧

川が、さらさらと歌っていた。^⑩

⑨ 　こおりつくようななまり色の川。川っぶちを走る空っ風が、ひびに^⑪しみる。^⑫

⑬ 　電線はヒューンと泣いているが、ノリオの家のおひるっ子は、元^⑭気だぞ。

ノリオの家の白い二羽のおひるは、川^⑮の中で泳ぎの競争だ。

なまり色の中^⑯の生きた二点。^⑰

じいちゃんは工場へ通っている。弁当^⑱を持って、毎日、空っ風の中^⑲を。

*
川っぶちにはもう青いぬふぐりが^⑲さいて、タカオが父ちゃんと^⑳自転車^㉑で通る。

タカオは自転車の後ろで笑ってたぞ。大きな、^㉒たのもしそうな、

②③ タカオの父ちゃん。

ノリオは、川つぶちのかれ草の中で、もうじき来る春を待っている。^{②④}

(2) 教材解釈

① 「あらしが過ぎた」

・ 自然現象としての「あらし」、即ち台風であろうが、八月十日が終戦であることから、戦争の「あらし」が過ぎたことも暗示しているのであろう。

② 「しげみ」

・ 草木のしげっているところ。

③ 「かけ」

・ 光などのあたらない部分や場所。

④ 「こおろぎが昼間も、リリリリと鳴いた」

・ 「昼間も」——夜は勿論、昼間も鳴く。誰も近寄らない場所で静寂そのもの。

・ 「リリリリ」擬音語。

・ 「鳴いた」擬人法。

⑤ 「すずきがまた、銀色の旗をふり」

・ 前出。

・ 第三場面では、戦地に行く父ちゃんを見送るように旗をふり、ここでは、帰ってきた父ちゃんを迎えるように旗をふっている。

⑥ 「父ちゃんは小さな箱だった」

・ 直接的に父ちゃんが亡くなったと表現せず、間接的に「小さな箱」と表現し、亡くなって「小さな箱」の中の遺骨となって帰ってきたことを表している。

⑦ 「じいちゃんが、う、うっと、きせるをかんだ」

・ 「う、うっと」は、じいちゃんが声を抑えて泣き、泣き声がないように、きせるを噛んでいる。

・ ただ一つ待ち望んでいた父ちゃんの生還が、無に帰したことへの悲痛なじいちゃんの思い。

・ この表現も行動によって、心情を表している。

⑧ 「歌っていた」

・ 川は、ノリオやじいちゃんの不幸に同情もしなければ、戦争への怒りも示さない。ただ流れているに過ぎない。それだけに戦争の非情さが浮き出してくる。擬人法。

⑨ 「こおりつくような」

・ 「こおりつく」＝凍ってかちかちになる。比喩法。

⑩ 「なまり色の川」

- ・ 「なまり色」 || なまりのような色。うすいねずみ色。灰色。
- ・ 体言止め。「なまり色の川」を強調。

・ 「こおりつくようななまり色の川」の身を切るような冷たさが、年老いたじいちゃんや幼いノリオにのしかかっている。二人には、暗く重い現実がある。

⑪ 「走る空っ風」

- ・ 「空っ風」 || 雨風を伴わないで激しく吹く乾いた風。
- ・ 「走る」は、激しく吹く様子。擬人法。

⑫ 「ひびにしみる」

- ・ 「ひび」 || 手足の皮膚が寒さのために荒れて、細かく裂けたもの。
- ・ 「しみる」 || 体に強い刺激を感じる。

⑬ 「電線はヒューンと泣いている」

- ・ 「ヒューン」擬音語。
- ・ 電線が空っ風に吹かれて音を立てて揺れている様子。
- ・ 「泣いている」——「泣いているようだ」擬人法と比喩法。

⑭ 「元気だぞ」

- ・ 「だ」 || 断定。

・ 「ぞ」 || 強調。

- ・ 特別に「元気である」ことの強調。それは逆境の中でも、たくましく生きる姿を表している。

⑮ 「川の中で泳ぎの競争だ」

- ・ 「空っ風」が吹き荒れ、「こおりつくようななまり色の川」の中での泳ぎの競争。前の文の「元気だぞ」の説明。

⑯ 「生きた二点」

- ・ 体言止め。強調。

・ 直接的には、ノリオの家の二羽のあひるの子を描いているが、間接的には、じいちゃんとノリオを象徴している。

・ 「生きた」は、厳寒の中でもじいちゃんとノリオは、元気にたくましく生きていることを暗示している。

⑰ 「工場へ通っている」

- ・ 「こうば」 || 機械などを使って、比較的小規模に物品の製造や加工をする施設。

・ じいちゃんはノリオとの生活を支えるため、げた作りをやめて町工場へ勤めたのである。

⑱ 「弁当を持って、毎日、空っ風の中を」

- ・ 前文とセットになって倒置法。「工場へ通っている」を強調。
- ・ 通常の文の順序

じいちゃんは、弁当を持って、毎日、空っ風の中を工場へ通っている。

⑱ 「いぬふぐり」

- ・ 「いぬのふぐり」 || 高さ十五センチメートル。三〜四月頃、小さな淡紅紫色の花が咲く。挿し絵。(教科書の注)

⑳ 「タカオが父ちゃんと自転車を通る」

- ・ 語り手の視点が、ノリオの目と重なっている。
- ・ タカオの記述はないが、おそらくノリオの家の近所に住む同世代の少年であろう。

㉑ 「笑ってたぞ」

- ・ 「ぞ」は強調。タカオは、父ちゃんと楽しそうに笑っている。
 - ・ 「いいなあ、タカオには父ちゃんがいる」——ノリオの思い。
- ㉒ 「たのもしそうな」
- ・ 「たのもしい」 || 頼りにすることができて、心強い。

㉓ 「タカオの父ちゃん」

- ・ 体言止め。強調。
 - ・ 自分にも父ちゃんがいたらなあとタカオをうらやましく思い、タカオの父ちゃんに自分父ちゃんをだぶらせている。
- ㉔ 「春を待っている」
- ・ 語り手の視点に戻っている。

- ・ 「早春」では、ノリオは母ちゃんの背中で川のおいをかいた。「また早春」では、川とノリオと母ちゃんの「追いかけて」の中にならぬ。今、川つぶちで春を待つノリオは、もしかしたら母ちゃんが来るのではないかという淡い思いを持っていたであろう。

(3) 本時の目標

- ・ 父ちゃんが小さな箱になって帰ってきたことに、じいちゃんは悲痛な思いでいることが分かる。(「また秋」)
- ・ じいちゃんは工場へ通い、ノリオは春を待っているが、二人とも元気に毎日を送っていることが分かる。(「冬」)
- ・ 擬音語、擬人法、行動によって心情を表現、比喩法、倒置法などが分かる。

(4) 板書

あらし

- ・ 台風

リリリリ

- ・ 戦争
- ・ ぎ音語

鳴いた

- ・ ぎ人法

銀色の旗をふり

- ・前——送るように
- ・今回——むかえるように

小さな箱

- ・遺骨
- ・なくなつたことの表現

う、うっと

きせるをかんだ

- ・声をおさえて泣く
- ・泣き声もれないように
- ・深い悲しみ
- ・望みが消えた

歌っていた

- ・ぎ人法
- ・ノリオの家の不幸——同情しない
- ・戦争——怒りも示さない
- ・ただ流れている——戦争の非情さ
- ・比喩法

こおりつく

なまり色の川

空っ風

走る

ヒューン

泣いている

ぞ

泳ぎの競争

- ・ぎ人法、比喩法
- ・強調
- ・「元気だぞ」の説明

生きた二点

- ・直接——二羽のあひるっ子
- ・間接——じいちゃんとノリオ
- ・元気に、たくましく

工場

空っ風の中を

笑つてたぞ

- ・生活を支える
- ・とう置法——前文を強調
- ・楽しそう
- ・いいなあ、父ちゃんがいて
- ・たよりになって、心強い

タカオの父ちゃん

- ・うらやましい
- ・父ちゃんがいたらなあ

春を待っている

- ・母ちゃんが戻ってくるかも

(5) 発問

(a) 「あらし」とは何のことか。

(b) 「リリリ」「鳴いた」は、それぞれ何という表現方法か。

(c) 「銀色の旗をふり」は、前回と今回とではどう違うか。

(d) 「小さな箱」とは何か。また、それは何を表しているか。

(e) 「う、うっと」はどんな泣き方か。

(f) 「きせるをかんだ」のはなぜか。

- (g) 「歌っていた」川は、人間の生活とどのような関係にあるか。
- (h) 「こおりつく」は、何という表現方法か。
- (i) 「なまり色の川」の「なまり色」とはどんな色か。
- (j) 「空っ風」とは、どんな風か。
- (k) 「走る」「ヒューン」「泣いている」「ぞ」は、それぞれ何という表現方法か。
- (l) 「泳ぎの競争」は何を説明しているか。
- (m) 「生きた二点」とは何のことか。また、何を表しているか。
- (n) じいちゃんが「工場」へ通っているのは何のためか。
- (o) 「笑ってたぞ」からどんな様子が分かるか。また、それを見ているノリオは何を思ったか。
- (p) 「たのもしそうな」とはどんな意味か。
- (q) 「タカオの父ちゃん」を見て、ノリオは何を思っているか。
- (r) 「春を待っている」ノリオは、春以外に何を待っているか。
- (6) まとめ
- ・ 「また秋」でのじいちゃんと、「冬」のじいちゃんの比較、タカオの父ちゃんを見ているノリオ、表現の工夫などにふれて感想を書こう。

(1) 教材文(第九時)

さらさらとすずいせの音をたてて、^①今日もまた川は流れている。^②
 川の底から拾ったびんのかけらを、^③じいっと目の上に当てている
 と、ノリオの世界はうす青かった。^④

^⑤キラキラ照りつける真夏の太陽も、^⑥銀色にキラキラ光るだけ。^⑦

*

^⑧いくたびめかのあの日がめぐってきた。

まぶしい川のまん中で、母ちゃんを一日じゅう、^⑨待ってたあの日。^⑩
 そしてとうとう母ちゃんが、もどってこなかった夏のある日。

ドド……ンという遠いひびきだけは、ノリオも聞いたあの日の朝、
 母ちゃんはヒロシマで焼け死んだという。^⑪ノリオたちがなんにも知らないまに。^⑫

^⑬じいちゃんが、母ちゃんを探して歩いた時、暗いヒロシマの町に
^⑭は、死がいから出るりんごの火が、いく晩も青く燃えていたという。^⑮

^⑯折り重なってたおれた家々と、^⑰折り重なって死んでいる人々の群れ
^⑱……。子供を探す母ちゃんと、^⑲母ちゃんを探す子供の声。^⑳

^㉑そして、ノリオの母ちゃんは、とうとう帰ってこないのだ。

^㉒じいちゃんも、ノリオもだまっている。

^㉓年寄りすぎたじいちゃんにも、小学二年のノリオにも、何が言えよう。

(2) 教材解釈

① 「せ」

- ・ 川や海の浅いところ。浅瀬。

② 「今日もまた川は流れている」

- ・ 人間の生活との関わりはあるが、川は人間世界に関係なく永久に流れ続けている。

③ 「びんのかげら」

- ・ プロローグの「茶わんのかげら」と同様、この川は人間の日常生活と結びついている。

④ 「じっと」

- ・ 「じっと」 || 見させるさま。目を凝らすさま。
- ・ 「凝らす」 || 一点に集中させる。

⑤ 「ノリオの世界はうす青かった」

- ・ 語り手の視点が、ノリオの目と重なる。
- ・ 「うす青」 || 薄い青色。
- ・ 「びんのかげら」を通して見えるのは、「うす青い」世界であり、それは「あの日」の世界である。母ちゃんの帰って来ない寂しく悲しい世界であった。

⑥ 「キラキラ」

- ・ どぎつく光が輝く様子。「きらきら」は「きらきら」に比べて光がどぎつい感じ。擬態語。

⑦ 「どぎつい」 || 非常に感じが強い。

- ・ 「きらきら」(平仮名)が通常の表記だが、片仮名にすることによって一層の強調をしている。後の「キラキラ」も同じ。

⑧ 「銀色にキラキラ光るだけ」

- ・ 「キラキラ」擬態語。
- ・ それはノリオの見る「うす青い」世界であり、現実から離れたノリオの幼い日の回顧の世界である。

⑨ 「いくたびめかのあの日」

- ・ 「いくたび」 || 何度も。いくど。
- ・ 「あの日」は、母ちゃんが帰って来なかった日、八月六日のこと。
- ・ 何度目かの、母ちゃんが帰って来なかった八月六日。
- ・ ノリオの二才の時の八月六日、今一年生のノリオの八月六日。
- ⑨ 「待ってたあの日」
- ・ 体言止め。強調。
- ・ 「あの日」の繰り返し。
- ・ ノリオにとって「あの日」は、忘れることのできない特別な日であり、毎年「あの日」の八月六日には、母ちゃんが帰って

来るのを待っていたのであろう。

⑩ 「夏のある日」

- ・ 三度目の「ある日」の繰り返しと体言止めの繰り返し。
- ・ 「ある日」↓「待ってたある日」↓「夏のある日」と「ある日」が次第にいつのことかを明確にしていって表現になっている。

⑪ 「いう」

- ・ 伝聞⇨伝え聞くこと。人づてに聞くこと。
- ・ ドド……ンという音を聞いていたノリオは、その音の正体で母ちゃんが死んだということは知らなかったが、後から聞かされて知ったのであろう。

⑫ 「ノリオたちがなんにも知らないまに」

- ・ ノリオやじいちゃんは、母ちゃんがヒロシマで焼け死んだということを知らないまに。
- ・ 前の文とセットで倒置法。
- ・ 通常の文の順序
ドド……ンという遠いひびきだけは、ノリオも聞いたあの日の朝、ノリオたちがなんにも知らないまに、母ちゃんはヒロシマで焼け死んだという。
- ・ 「ドド……ンという遠いひびきだけは、ノリオも聞いたあの日の朝」を強調。

⑬ 「じいちゃんが、母ちゃんを探して歩いた時」

- ・ 「八月六日」の中に、母ちゃんは「ヒロシマへ出かけていった」、じいちゃんが「夜おそく出かけていった」とある。この時、じいちゃんはヒロシマへ母ちゃんを探しに行ったのである。

⑭ 「死がい」

- ・ 死体。しかばね。

⑮ 「りん」

- ・ 動植物の体内にも含まれている。常温では徐々に酸化されて暗所で青白色の微光を放ち、五十度に至れば発火する。

⑯ 「いう」

- ・ ノリオが、じいちゃんから聞いたのであろう。

⑰ 「折り重なって」

- ・ 「折り重なる」⇨上へ上へといくえにも重なる。
- ・ 「折り重なって」の繰り返し。
- ・ 並立助詞「と」によって、二つのことを並べている。
「折り重なってたおれた家々」と「折り重なって死んでいる人々の群れ」

⑱ 「群れ」

- ・ 家屋も人々も大きく、多くの被害があったことの強調。
- ・ あつまり。むらがり。

⑱「-----」

・ 余りの大惨事（むごたらしい出来事。痛ましい事件。）に言葉もない、声をのむことを表している。

⑳「子供を探す母ちゃんと、母ちゃんを探す子供の声」

・ これも並立助詞「と」によって、二つのことを並べている。

「子供を探す母ちゃん」と「母ちゃんを探す子供」

・ 「子供を探す母ちゃん」の下に「の声」が省略。

・ 体言止めで、母ちゃんや子供の声を強調。

・ 悲惨（悲しく痛ましいこと）極まる状況である。

㉑「とうとう帰ってこないのだ」

・ ノリオには、「帰ってこない」のはヒロシマで死んだからだと分かっているが、ノリオは母ちゃんに会いたい思いで一杯である。

㉒「じいちゃんも、ノリオもだまっている」

・ じいちゃんもノリオも「だまっている」ことしかできないのである。だから、悲しみが消えることはない。

㉓「年寄りすぎたじいちゃんにも、小学二年のノリオにも、何が言えよう」

・ 「言えよう」反語。「言えない」（断定）を強調。
・ 戦争に対しての激しい叫びはないが、㉒㉓は静かな叫びの文。

(3) 本時の目標

・ いくたびめかのあの日、母ちゃんはヒロシマで焼け死んだが、じいちゃんもノリオも戦争に対して黙っていることが分かる。

・ 擬態語、繰り返し、倒置法、反語などが分かる。

(4) 板書

うす青かった

・ うす青い世界

・ 母ちゃんの帰ってこないさびしい世界

ギラギラ キラキラ・ぎ態語

あの日

・ 母ちゃんが帰って来なかった日

・ ノリオの二才の時

・ わすれることのできない特別の日

・ 強調、くり返し

いう

知らないまに

・ 後で知らされた

・ とう置法

・ くり返し

・ 家と人——大きな、多くのひ害

・ むごたらしき、痛ましき

・言葉もない

・声も出ない

声
・強調

・悲しさ、痛ましさ

だまっている

・戦争

何が言えよう

・静かなさけび

・「言えない」

(5) 発問

(a) ノリオの世界は「うす青かった」と言っているのは誰か。また、

その「うす青」い世界とは、どんな世界か。

(b) 「キラキラ」「キラキラ」は、何という表現方法か。

(c) 「あの日」とは、どんなことがあった日で、ノリオにとってど

んな日か。また、どんな表現方法が使われているか。

(d) 「焼け死んだという」の「いう」は、どんな時に使われるか。

(e) 「知らないまに」という文と前の文を併せると、どんな表現方

法か。

(f) 「折り重なって」からどんな様子が想像できるか。また、どん

な表現方法が使われているか。

(g) 「-----」は、何を表しているか。

(h) 子供の「声」から何が分かるか。

(i) 「だまっている」「何が言えよう」

ア 何に対してか。

イ それはどんな叫びか。

ウ 「何が言えよう」の後に、どんな言葉が続くか。

(6) まとめ

・ うす青いノリオの世界、だまっているじいちゃんとノリオ、
表現の工夫などにふれて感想を書こう。

(1) 教材文(第十時)

ノリオは、青いガラスのかけらを、^①ぽんと川の水に投げてやった。^②^③

すぐにまぶしい日の光が、^④ノリオの世界に返ってきて、ノリオは仕

事を思い出す。

じいちゃんの工場のやぎっ子の干し草かりが、^⑤ノリオの仕事だ。^⑥

青々としげった岸辺の草に、^⑦サクッ、サクッとまたかまを入れだ

すと、桜の木につないだやぎっ子が、^⑧ミエエ、^⑨ミエエとノリオを呼

んだ。^⑩

^⑪母ちゃんやぎを呼ぶような、^⑫やぎっ子の声。

草いぎれのひどいかり草の上で、ノリオはやぎっ子と、取っ組み合う。上になり、下になり、¹⁵ 転げ回る。青い空を映しているやぎの目玉。

白い日がさがチカチカゆれて、子供の手を引いた女の人が、葉桜の間を遠くなった。

ザアザアと音を増す川のひびき。

ノリオは、かまをまた使い出す。

サクッ、サクッ、サクッ、母ちゃん帰れ。

サクッ、サクッ、サクッ、母ちゃん帰れよう。

川は日の光を照り返しながら、いつときも休まず流れ続ける。

(2) 教材解釈

- ① 「青いガラスのかけら」
 - ・ 「あの日」を見る物。
- ② 「ほんと」

・ 勢いよく手から出すさま。擬態語。

③ 「投げてやった」

・ 「あの日」に別れを告げた。

・ いつまでも悲しんでも仕方がない。

④ 「ノリオの世界」

・ 「うす青いノリオの世界」は、回想の世界。

・ この「ノリオの世界」は、現実、現在の世界。

⑤ 「干し草」

・ 刈り取って干した草。家畜のえさにする。

⑥ 「ノリオの仕事だ」

・ 「仕事」の繰り返し。

・ ノリオはまだ小学二年だが、じいちゃんを助けて、工場のやぎの面倒をみているのであろう。

⑦ 「サクッ」

・ 草を刈る音。擬音語。

⑧ 「またかまを入れだすと」

・ 「びんのかげら」を目の上に当てる前は、草刈りをしていたことが「また」で分かる。

⑨ 「ミエエ」

・ やぎの鳴き声。擬声語。

⑩ 「ノリオを呼んだ」

・ 擬人法。

⑪ 「母ちゃんやぎを呼ぶような」

・ 比喩法。

⑫ 「やぎっ子の声」

・ 体言止め。強調。

・ 「あの日」に別れを告げたはずだが、「母ちゃんを呼ぶような、やぎっ子の声」に、ノリオも「あの日」と母ちゃんが再びよみがえってくる。

⑬ 「草いきれ」

・ 夏、しげった草原などの、むっとする熱気。

⑭ 「取っ組み合う」

・ 互いに組みつく。

・ 「あの日」と母ちゃんへの思いがよみがえったノリオは、どうしようもなく、やぎっ子と取っ組み合うのである。その思いを追い払うように。

⑮ 「転げ回る」

・ 夢中になって転げ回っている内は、忘れることができる。

⑯ 「青い空を映しているやぎの目玉」

・ 語り手の視点とノリオの目が重なり、ズームインした表現。

・ 「やぎの目玉」体言止め。強調。

・ 「青い空を映しているやぎの目玉」から、ノリオはまた「うす青い世界」を思い出したのではないだろうか。

⑰ 「チカチカ」

・ 鋭い光が繰り返し光る様子。擬態語。

・ 「ちかちか」(平仮名)が「チカチカ」(片仮名)と強調。

・ ノリオの目を強く引いたことによる強調。

⑱ 「子供の手を引いた女の人」

・ 再びノリオに、母ちゃんがよみがえる。

⑲ 「遠くなった」

・ 女の人が近くにいる時から、遠く離れていく姿をずっと目で追っていた。

⑳ 「ザアザアと音を増す川のひびき」

・ 体言止め。強調。

・ 「八月六日」の中に、「ザアザア高まる川音の中に、ただ、母ちゃんを待っていた」とある。その時のことが、次第に鮮明に思い出し、こみ上げてくる母ちゃんへの強い思い。

㉑ 「ノリオは、かまをまた使い出す」

・ この文の前の一行あきは、子供の手を引いた女の人に触発されて、母ちゃんのことを思い出している間を表す。そして、現

実に戻り、干し草刈りを始める。

⑳ 「母ちゃん帰れ」㉑ 「母ちゃん帰れよう」

- ・ 今のノリオにできることは、仕事に精を出すことと、死んでいることを理解し、叶う筈もない「母ちゃん帰れ」「母ちゃん帰れよう」という願いを心の中で叫ぶことだけなのである。
- ・ ノリオのせつない叫びであり、静かなる叫びである。

㉒ 「川は日の光を照り返しながら、いつときも休まず流れ続ける」

- ・ 前の文との間が一行あきになっているのは、語り手の視点がノリオと離れ、川へ転換されたからである。
- ・ 文頭のプロローグに対し、エピローグとなっている。
- ・ ノリオの悲しさや願い、今を元気に生きていこうとするノリオの前途や明るさ・希望といったものを包みこんで、川はいつときも休まず流れ続けていく。ノリオを含めたすべての人間と関わりを持ちながら。

- ・ ノリオのせつない思いは、何ともやりきれなさを思わせるものであるが、それが暗い・重苦しいものにならず、しみじみとして、ある救いを感じさせるのは、この川のイメージがもたらすものであろう。

(3) 本時の目標

- ・ ノリオは、「母ちゃん帰れ。帰れよう。」と心の中で叫びながらかまを使っているが、川はいつときも休まず流れ続けていることが分かる。

- ・ 擬態語、擬音語、比喩法、片仮名などが分かる。

(4) 板書

ぼんと

投げてやった

- ・ ぎ態語
- ・ 「あの日」に別れを告げた
- ・ 悲しんでいてもしかたがない

ノリオの世界

ノリオの仕事

- ・ 現実、現在の世界
- ・ じいちゃんを助ける

サクッ

また

- ・ ぎ音語
- ・ びんのかけらを拾う前

ミエエ

呼んだ

- ・ ぎ声語
- ・ ぎ人法

呼ぶような

- ・ 比喩法

やぎっ子の声

- ・ 母ちゃんがよみがえる

取っ組み合う

- ・ 思いを追いはらうため

- ・ 忘れることができる

やぎの目玉

・ズームイン

チカチカ

・ぎ態語

・カタカナによる強調

・ノリオの目を引く

・母ちゃんが再びよみがえる

子供の手を引いた
女の人

遠くになった

・ずっと目で追っていた

川のひびき

・八月六日を思い出す

(一行あき)

・母ちゃんのことを思い出している間

母ちゃん帰れ

・仕事に精を出すこと

母ちゃん帰れよう

・かなうはずもないこと

・心の中でさげぶこと

・せつないさげぶ

・静かなるさげぶ

・語り手の目が川へ移る

・エピソード

・ノリオの悲しさ・願い・明るさ・希望を
包みこんで

・ノリオや人間との関わり

(5) 発問

(a) 「ぼんと」は、何という表現方法か。

(b) かけらを「投げてやった」のは、ノリオのどんな思いからか。

(c) 「ノリオの世界」とは、どんな世界か。

(d) ノリオが、「ノリオの仕事」をするようになったのはなぜか。

(e) 「サクッ」は、何という表現方法か。

(f) 「また」という言葉から何が分かるか。

(g) 「ミエエ」「呼んだ」「呼ぶような」は、それぞれ何という表現方法か。

(h) 「やぎっ子の声」は、ノリオに何を思い出させるか。

(i) 「取っ組み合う」のはなぜか。

(j) 「やぎの目玉」という表現は、テレビカメラの何という手法か。

(k) 「チカチカ」は、何という表現方法か。また、カタカナになっ

ているのはなぜか。

(l) 「子供の手を引いた女の人」から、ノリオは何を思い出すか。

(m) 「遠くになった」とあるが、ノリオはいつから見ているのか。

(n) 「川のひびき」から、ノリオは何を思い出すか。

(o) 一行あいているのはなぜか。

(p) 「母ちゃん帰れ」「母ちゃん帰れよう」から、ノリオのどんな

思いが伝わってくるか。

(q) 一行あいているのはなぜか。

(r) 「流れ続ける」川から、読者に何が伝わってくるか。

(s) 最後の二行は、第一場面のプロローグに対し、エピローグと言
う。

(6) まとめ

・ 青いガラスのかげらを投げたこと、やぎっ子との取っ組み合
い、子供の手を引いた女の人、「帰れ。帰れよう。」とさげぶノ
リオ、エピローグの川、表現の工夫などにふれて感想を書こう。

七 読書指導

この教材を読書として扱う場合の留意点について述べる。

(1) 視点を明らかにする。

三人称客観の視点（語り手）。いなかびた川の音を「すずしい」と感じ、「山の中で聞かせせらぎのような、なつかしい」と感じ、「い」ときの絶え間もなく、この音をひびかせてきたのだろう。」と考える語り手である。また、ノリオや母ちゃんたちをいとおしみの

目をもってながめている語り手である。「父ちゃんのかたいてのひら——ノリオの小さい足をさすっていたっけ」「なにもかも、がよくしてくれる母ちゃんの手……あったかいあの手」などがそれに当たる。また、戦いに対するいきどおりを、「年寄りすぎたじいちゃんにも、小学二年のノリオにも、何が言えよう」と考える語り手である。そういう考え方、感じ方をする語り手の視点から描かれている。ところどころ、ノリオの「内の目」と重なる。

(2) 父ちゃんが戦地へ。残されたノリオと母ちゃん。

「旗をふった」とあるから、にぎやかそうに見えるが、その中にある「さみしさ」を、すすきの穂のイメージとして捉え——暗い停車場のイメージにつなげる。——いっときもおしいというように、ノリオの小さい足をさする、父ちゃんの切ない感情——飼いのすえたにおい、に漂うやり切れなさ——残された母ちゃんとノリオがながめる、暮れかけた町の上の、広い広い夕焼け空のイメージと——日に焼けた細い手で、きつくきつくノリオをだく、母ちゃんの心情を重ね合わせ——ぬれたような母ちゃんの黒目に映る赤とんぼのイメージを結びつけていく。そして、全体として「さみしさ」「暗い、沈んだ気持ち」「哀感」を捉えていく。このように、イ

メージの重なり合い、ひびき合いとして捉えてくる「面が、この教材には多い。

(3) ノリオは幸せな二才の神様。戦争の渦の中の、悲しい平和。

語り手の視点が、ノリオの「内の目」と重なるところが多く見られる。川がノリオに呼びかけるところ、川が「こわい川。」「しばらくだまっている。」「キラキラ笑いだす。」など、擬人化して表現してあるところ、「だれかの手がノリオの体をひっとらえ」というところなどがそれに当たる。

川とノリオと母ちゃんの「追いかっこ」は、一見まことに平和に見える。しかし、「母ちゃんが日に日にやつれる」現実があり、それはそのまま、戦争の渦に繋がっている。ノリオが何も知らない、幸せな神様であること、戦いの日の中に、小さな平和らしきものが存在すること、そのことがかえって悲劇性を高めていく。

(4) 川が流した黒いゴムぐつ、麦わらぼうし、黒いパンツ。——
暗い予感。

「黒いゴムぐつは帰ってこない。麦わらぼうしも帰ってこない。

黒いパンツも行ったきり——」——母ちゃんが、そのまま帰ってこないことを予測させる。このあたりでは、①それはノリオの考え方、感じ方か ②語り手の考え方、感じ方か ③読者の考え方か、感じ方かを明らかにしながら読ませていきたい。

(5) 青いガラスを目にあてた、うす青いノリオの世界。——戦争の非情さの連続性。川の流れのイメージとのひびき合い。

それは母ちゃんの死の確認、回想だけではない。じいちゃん二人で暮らし、タカオを乗せた父ちゃんを見、子供の手を引いた女の人を見、「母ちゃん帰れ。」と叫びながら草を刈る、今のノリオに繋がっている。

うす青いノリオの世界は、青いガラスのかけらを川の中へ投げ込めば、日の光のまぶしい現実の、現在の今の世界にすぐ繋がる。

(6) 草を刈り、やぎっ子と取っ組み合うノリオの思い——休まずに流れる川のイメージとのひびき合い。

最後の、川の形象で終わる終わり方の意味をしっかりと把握させたい。

参考文献

- ① 「川とノリオ」(『ひろがる言葉 小学国語六上』) 著作者 木下順二・今西祐行ほか 教育出版 平成十八年一月二十日 発行
- ② 『川とノリオ』 いぬいとみこ・作 理論社 一九九三年九月第十二版発行
- ③ 『ひろがる言葉 小学国語 教師用指導書 研究編 六上』編者 教育出版編集局 教育出版 平成十八年三月二十日 発行
- ④ 『小学校国語科 文学教材事典』 日本文学教育連盟編 鳩の森書房 一九七七年二月 三版
- ⑤ 「川とノリオ」(『小学校文学教材指導実践事典 下 四、五、六年』) 藤原宏・長谷川孝士・須田実編者 教育出版一九八四年六月十二日 初版第一刷発行
- ⑥ 「川とノリオ」(『授業に生きる文学教材研究事例集』) 授業技術研究所編 明治図書出版 昭和六十年三月二十五日 発行
- ⑦ 『国語大辞典』編者 金田一春彦ほか 小学館 一九八二年刊行
- ⑧ 『広辞苑』 新村出編 岩波書店 一九七七年刊行
- ⑨ 『全訳 漢辞海』 編者 佐藤進・濱田富士雄 三省堂二〇〇四年二月一〇日 第十二刷 発行
- ⑩ 『新選国語辞典』 編者 金田一春彦ほか 小学館昭和六十三年一月二十日 第三刷 発行